仙台市文化財調査報告書第258集

宮城県仙台市

郡山遺跡 22

―― 平成13年度発掘調査概報 ――

2002. 3

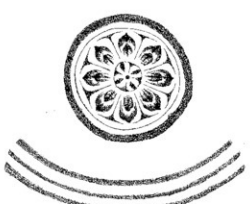
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第258集

宮城県仙台市

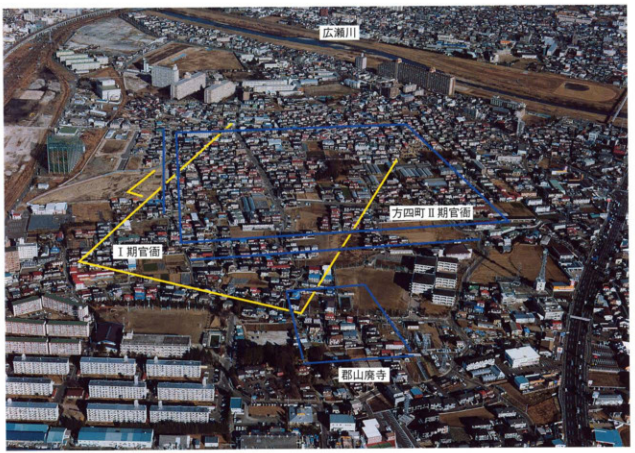
郡山遺跡 22

―― 平成13年度発掘調査概報 ――



2002. 3

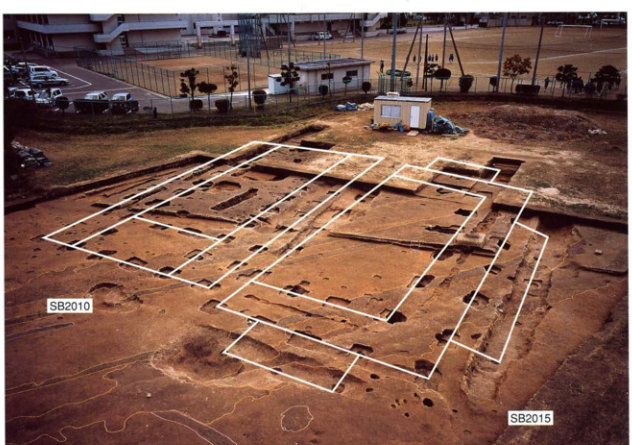
仙台市教育委員会



郡山遺跡全景（南より）

第138次調査区

第138次調査区南部（SB2010・SB2015　西より）



SB2010・SB2015全景（北西より）

序　　文

郡山遺跡の発掘調査も今年から第５次５カ年計画に入り、早くも22年が経過しております。これまで数々の成果を積み上げ、東北の古代史解明に一石を投じてまいりました。

幻の城柵として一端を現した昭和54年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として、私たちの前に明らかになってきました。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した最古の地方官衙・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな影響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度は南方官衙地区においての発掘調査を実施し、本書はここにその調査の記録を報告、公開するものです。また市街化への動きが著しい郡山地区にあって、小規模な開発に対応して実施された「仙台平野の遺跡群」についても合わせて報告いたします。

先人の残した貴重な文化遺産を次の世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の深い理解がなくしては成し得ないものであります。それらを目指した継続的な発掘調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様の多くのご協力と御支援の賜であり、ここに感謝申し上げる次第です。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神の高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成14年３月

仙台市教育委員会
教育長　阿　部　芳　吉

例　　言

1．本書は鄙山遺跡の平成13度範囲確認調査の概報である。

2．本調査は国庫補助事業である。

3．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　長島栄一　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ
　　松本知彦　Ⅲ、Ⅶ
遺構トレース　菅井百合子、岡まり子、石垣美佐江、大友浩美、小村田紀子
遺物実測　松本、伊勢多賀子、大友広美、鈴木由美、黒田照子、小林広和
遺物トレース　菅井、岡、大友（浩）、小村田、石垣
遺構写真撮影　長島、松本
遺物写真撮影　㈱アートプロフィール
遺物補修復元　赤井沢千代子、黒田、三浦千賀子
図版作成　長島、松本、菅井、吉田りつ子、岡
写真図版作成　長島、吉田
編集は長島、松本がこれにあたった。

4．遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点（X＝0、Y＝0）とし、高さは標高値で記した。

5．文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6．遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

ＳＡ　柱列などの塀跡	ＳＥ　井戸跡	ＳＸ　その他の遺構
ＳＢ　建　物　跡	ＳＩ　竪穴住居跡・竪穴遺構	Ｐ　ピット・小柱穴
ＳＤ　溝　　跡	ＳＫ　土　坑	

7．遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

Ａ　縄　文　土　器	Ｆ　丸瓦・軒丸瓦	Ｋ　石製品
Ｂ　弥　生　土　器	Ｇ　平瓦・軒平瓦	Ｌ　木製品
Ｃ　土師器（ロクロ不使用）	Ｈ　鴟　　尾	Ｎ　金属製品
Ｄ　土師器（ロクロ使用）	Ｉ　陶　　器	Ｐ　土製品
Ｅ　須　恵　器	Ｊ　磁　　器	

8．建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●＝柱痕跡の検出されたもの
○＝掘り方のみ検出されたもの
◌＝他遺構との重複により検出されないもの

9．遺物実測図の網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。

10．本概報の土色については「新版標準土色帳」（古山・佐藤：1970）を使用した。

11．本概報中の掘立柱建物跡の記載の中で「柱痕跡は21cmの円形で…」とあるものは、柱痕跡の直径が21cmの意である。

目　　次

序　文

例　言

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　調査計画と実績……2

Ⅲ　第138次発掘調査……4

　1．調査経過……4

　2．発見遺構・出土遺物……5

　3．まとめ……27

Ⅳ　第140次発掘調査……38

　1．調査経過……38

　2．発見遺構・出土遺物……38

　3．まとめ……41

Ⅴ　第142次発掘調査……43

　1．調査経過……43

　2．発見遺構・出土遺物……43

　3．まとめ……48

Ⅵ　第143次発掘調査……52

　1．調査経過……52

　2．発見遺構・出土遺物……52

　3．まとめ……52

Ⅶ　総括……54

　調査成果の普及と関連活動……62

Ⅰ　はじめに

平成13年度は郡山遺跡範囲確認調査第５次５ヵ年の２年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体　　仙台市教育委員会

調査担当　　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

文化財課　課長　大越裕光

管理係　係長　高橋　泰

主事　藤井明美

整備活用係　係長　田中則和

主査　木村浩二

主任　長島榮一

主事　坂本和男

文化財教諭　松本知彦

調査係　係長　結城慎一

教諭　豊村幸宏

文化財教諭　村上秀樹

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

会　長　工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授　考古学）

副会長　今泉隆雄（東北大学文学部教授　古代史）

岡田茂弘（東北歴史博物館館長　考古学）

桑原滋郎（宮城県教育庁参事兼東北歴史博物館学芸部長　考古学）

白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所長　考古学）

須藤　隆（東北大学文学部教授　考古学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御教示をいただいた。

地権者　加藤雅祉、相原秀盛、安藤直樹

調査参加者　赤井沢千代子、石垣美佐江、伊勢多賀子、伊藤貞子、大友広美、大友浩美、岡まり子、尾形陽子、日下啓子、黒田照子、小池房子、小林広和、小村由紀子、佐藤よし子、柴田徳郎、庄子範男、菅井百合子、鈴木由美、高橋ヨシ子、牧かね子、三浦市子、三浦千賀子、宮嶋都、鈴水芳子、依田光子、吉田りつ子、渡辺貞子

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

奈良文化財研究所　山中敏史、光谷拓実、千田剛道、三重大学人文学部教授　山中　章、近畿大学文芸学部教授　大脇　潔、奈良県立橿原考古学研究所　林部　均、大阪歴史博物館　佐藤　隆、財団法人大阪市文化財協会　積山洋、宮本佐知子、李　陽浩、東北大学大学院工学研究科助手　吉田　歓

Ⅱ　調査計画と実績

平成13年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第５次５ヵ年計画における第２年次目にあたる。第５次５ヵ年計画では、以下５項目の達成を目標にしている。

(1)　Ⅱ期官衙中枢部の構造の解明
(2)　郡山廃寺の内部構造の解明
(3)　Ⅰ期官衙の構造と変遷の解明
(4)　南方官衙の範囲と性格の解明
(5)　郡山遺跡調査成果概要書の作成　などである。

これらは平成11年度郡山遺跡調査指導委員会で審議し、了承されたものである。詳細は「仙台市文化財調査報告書第250集郡山遺跡21」Ⅰ２を参照していただきたい。これにより今年度は「(4)南方官衙の範囲と性格の究明」を主目的として、これまでと同様に国庫補助事業である『市内遺跡発掘調査』で発掘調査を実施することにした。発掘調査は、今年度より仙台城跡の主要遺構の遺存状況を把握するための発掘調査も含め、総経費3800万円、国庫補助金額1400万円の予算で計画した。またこれまで個人住宅などの小規模開発に伴う発掘調査は「仙台平野の遺跡群」として実施してきたが、今年度も該当する発掘調査が必要になったときには同様に対応することとした。したがって総経費3800万円を郡山遺跡発掘調査に2000万円、仙台城跡に1300万円、仙台平野の遺跡群として500万円という配分にした。これにより郡山遺跡発掘調査については、以下のような実施計画を立案した。

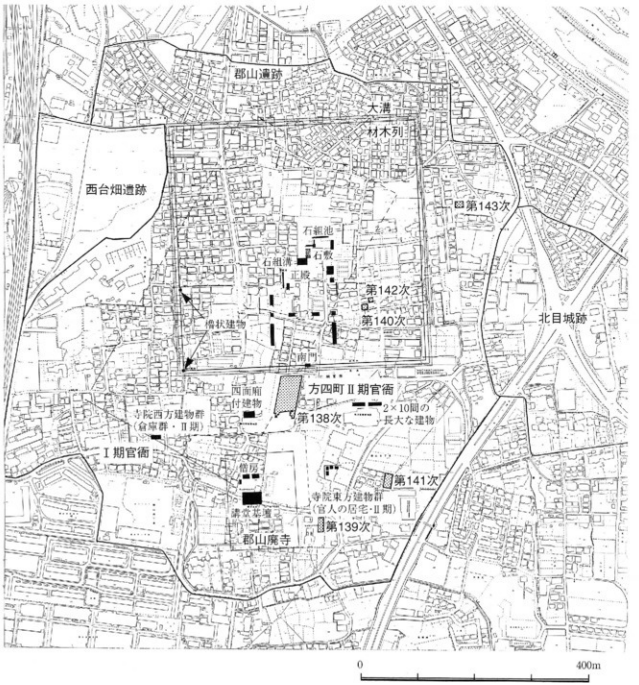
表１　発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
第138次	南方官衙西地区	1000㎡	５月～11月	範囲確認調査
第139次	方四町Ⅱ期官衙中枢部	10㎡	９月、10月	範囲確認調査

４月以降、電力施設の建設や国土交通省の庁舎建設ならびに個人住宅の建築等で、４箇所の調査が追加された。また当初予定されていた第139次調査は、地権者の土地利用の都合から実施することができなかった。よって年度当初から予定されていた第138次調査、東北電力の施設建設に伴う事前調査として第139次調査、個人住宅の建築に伴い調査の必要となった第140次、第142次、第143次調査、国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所の庁舎建設のための第141次調査の６箇所を以下のとおりに実施した。

表２　発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
第138次	南方官衙西地区	2100㎡	５月８日～12月21日	熊川確認調査	郡山遺跡発掘調査
第139次	郡山廃寺東隣接地	74㎡	５月28日～５月30日	電力施設建設	開発に伴う事前調査
第140次	方四町Ⅱ期官衙中枢部東	40㎡	７月４日～７月31日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
第141次	寺院東方建物群東	78㎡	７月30日～８月９日	庁舎建設	開発に伴う事前調査
第142次	方四町Ⅱ期官衙中枢部東	40㎡	８月１日～９月３日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
第143次	方四町Ⅱ期官衙東隣接地	26㎡	12月17日～12月17日	個人住宅建築	〃



第1図　郡山遺跡全体図

これらの調査のうち第139次調査と第141次調査は、開発に伴う事前調査であるため国庫補助事業の『市内遺跡発掘調査』では扱わず、別途報告する予定となっている。また第138次調査は1000㎡の調査面積を予定していたが、調査区南端より遺跡内でも重要な建物跡と見られる遺構に一部が発見されたため、調査区を拡張している。それに伴い予算計画も年度途中で一部変更し、郡山遺跡の発掘調査に200万円増額している。したがって郡山遺跡発掘調査の予算が2200万円となり、総経費4000万円となっている。なお今回「仙台平野の遺跡群」として調査した第140次、第142次、第143次調査は郡山遺跡内の調査であるため、報告は本書に含め報告することにし、「仙台平野の遺跡群」としての報告は刊行しないことにした。よって本事業の報告は「仙台市文化財調査報告書第258集郡山遺跡22－平成13年度発掘調査概報－」、「仙台文化財調査報告書第259集仙台城跡Ⅰ」である。

Ⅲ　第138次発掘調査

1．調査経過

第138次調査区は、昨年度実施した第135次調査区の北に位置し、Ⅰ期官衙の東辺部と方四町Ⅱ期官衙の南前面に広がる南方官衙の西地区内にあたる。現在郡山遺跡の西に隣接する西台畑遺跡の周辺で進められている「長町駅都心土地区画整理事業に伴う発掘調査」では、昨年のⅣ区の発掘調査において方四町Ⅱ期官衙の外郭大溝に平行するように溝跡が発見されていた。このような状況はこれまでの調査でも方四町Ⅱ期官衙の南辺において、第65次調査（SD984）や第124次調査（SD1860）で確認されている。今回の調査区でも同様に外郭の大溝に平行する溝跡が発見される可能性が考えられた。またこの地区は西の第85次調査区で発見されたSB1277建物跡のように政庁正殿の規模を上回る四面廂付建物や、第65次調査区で発見されたSB1320建物跡などのように南北2間、東西10間に 及ぶ東西に長い建物が複数発見されている地区である。官衙内部にあって主要な殿舎に該当するような建物跡が立ち並んでいる地区である。よって今次調査区からも規模の大きな建物跡の発見が想定されていた。また、第135次調査区と昭和59年度の第48次調査区でⅠ期官衙の二時期の東辺となる材木列を確認しており、その延長部分の発見についても想定されていた。

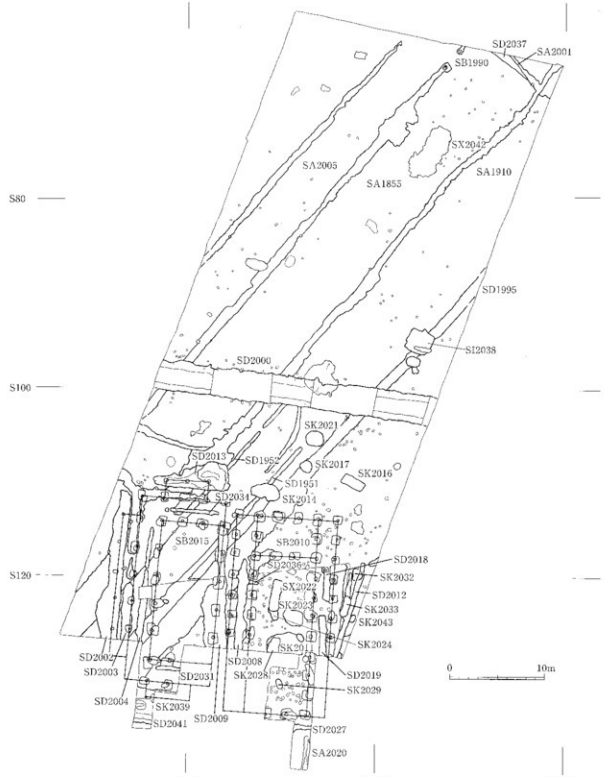
調査区の現況は、旧水田で仙台市土地開発公社の所有地となっている。表土（第Ⅰ層）の厚さは10cm～20cmで、遺構の検出面までの層序が調査区の地点によって違っていた。調査区南端のD区のみ表土の下に第Ⅱ、Ⅲ層があり、遺構の検出されるまで表土上から35～40cm程となっている。D区より北のA～C区においては、表土直下が遺構の検出面となっていた。当初はD区と同様に第Ⅱ、Ⅲ層が堆積していると想定していたため、当初は1000㎡程度の調査を予定していたが、表土排除開始後に下層の状況が把握されたため、年度内に調査可能な2000㎡に面積を変更した。

調査は5月当初から準備に入り、5月14日から表土排除を開始した。9月に調査区南端から重要な建物跡が発見されたため、拡張を行なって建物の全容を把握した。調査成果がまとまった11月15日に報道発表、11月17日に現地説明会を実施した。追加の記録を行い埋め戻し、整地作業が終了したのは12月21日である。

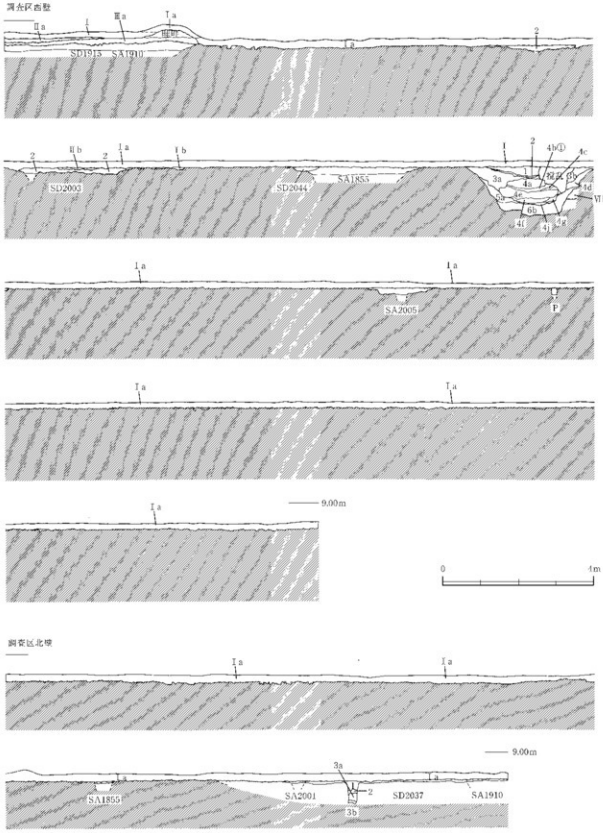
第2図　第138次調査区位置図

2．発見遺構・出土遺物

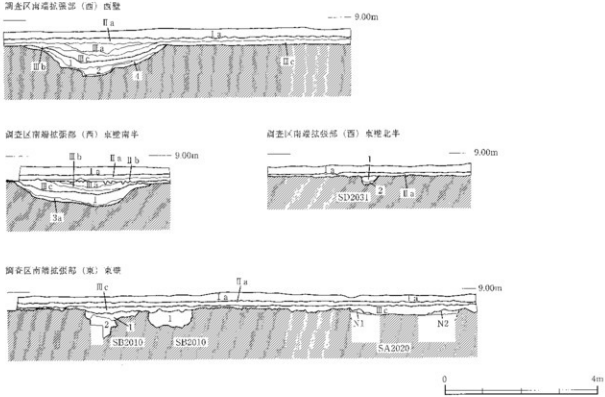
今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡３棟、柱列１列、材木列４列、溝跡21条、土坑13基、性格不明遺構２基、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第Ⅳ層上面で検出されている。第Ⅱ、第Ⅲ層は、調査区の南端Ｄ区のみに堆積し、いずれも水田跡の耕作土と考えられる。なお第Ⅲ層中には灰白色火山灰が堆積している箇所が見られる。以下ここで報告するのは、第Ⅳ層上面で検出された遺構である。



第３図　第138次調査区遺構配置図（1/400）



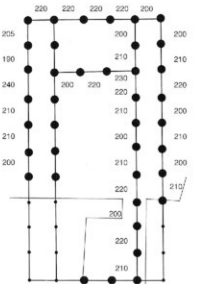
第4図　第138次調査区断面図(1)（1/100）



遺構名	層位	土色	土性	備考
調査区北端・東端・南端拡張部（西）				
基本層位	1a	7.5Y4/1 黒色	粘土	耕作田
	Ⅱa	10YR4/1 褐灰色	粘土	全体に細かく酸化鉄を含む（水田跡）
	Ⅱb	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	Ⅲa	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	火山灰を全体に含む。SD2002～3埋積土に類似している
	Ⅲb	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	全体にマンガン斑を含む
	Ⅲc	10YR4/2 褐灰色	粘土	褐色土を小ブロックで含む
SD2041	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	マンガン斑を含む
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化の強い火山灰を含む。SD2013の埋積土に類似している
	3a	10YR7/6 明黄褐色	粘土	褐灰色土を含む
	3b	10YR6/4 褐灰色	粘土	火山灰土を多量に含む
	3c	10YR7/6 明黄褐色	粘土	褐灰色土を含む
	4	5Y5/1 灰色	粘土	
SD2000	1～6			第16層参照
SD2031	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を全体に含む
調査区南端拡張部（北）				
SP2010N9E2	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭を取り穴
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	白色粘土をブロック状に含む。掘り方埋土
SP2010N10E2	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄褐色、白色粘土を含む
SA2000N4	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	V層とV層が混合している
SA2020N2	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	V層とV層が混合している
調査区北端				
SA1956	1	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土質シルト	黒褐色砂土・灰白色砂を含む
SA1919	1	10YR6/6 明黄褐色	粘土	黒褐色粘土を少ブロックで含む
SA2001	1	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土	
SD2037	1a	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄をブロック状に含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	1層より暗い
	3a	10YR8/2 灰白色	粘土	酸化鉄を多量に含む
	3b	10YR8/2 灰白色	粘土	

第５図　第138次調査区断面図2）(1/100)

SB2010掘立柱建物跡　桁行10間（総長21m、柱間寸法200～220cm）、梁行５間（総長10.8m、柱間寸法200～220cm）の南北棟で、東西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の東桁行でN－3°－Wである。身舎の柱穴は一辺85～120cmの隅丸方形で、柱痕跡は25～38cmの円形または楕円形である。廂の柱穴は一辺70～90cmの隅丸長方形で、柱痕跡は25～30cmの円形または楕円形である。身舎は北から２間のところで仕切られている。柱穴の掘り方や柱痕跡は、身舎が廂に較べやや大きくなっている。柱痕跡は木質の材が残っているもの（N11E2柱穴）がある。また各柱穴の柱は抜き取りあるいは切り取りを受けており、抜き取りの際に柱下部が折れて地中に残ったもの（N10E2柱穴）も見られる。



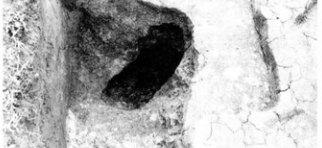
第６図　SB2010模式図

遺物は、掘り方中ではN7E1から器種は不明であるが、内面黒色処理され外面に二条の暈痕がある土師器C－916底部片（第７図１）が出土している。N3E3からは長さ5.5cmの頂部が平坦なN－110釘（写真30）が、N4W2からも長さ9.5cmの釘状の鉄製品N－109（写真29）が出土している。抜き取り穴では、N5E2から高さ6.5cm以上の線刻されたE－465円面硯（写真20）、N6E1からは底部に回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされた須恵器E－456坏（第８図１）、N6W2からは長さ4.5cmの釘状の鉄製品N－108（写真31）、N9E2からは底部がやや摩滅しているが回転ヘラ切り痕跡が観察される須恵器E－458坏（第８図４）、N11E2からは宝珠形のツマミを有する大形の須恵器E－466蓋の破片（写真28）、N11E3からは内部に緑色の鉱物を含むK－253石（写真33）が出土している。なおN10E2の抜き取り穴からは、多くの遺物が出土している。底部に回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリが施された須恵器E－452坏（第８図３）、底部に手持ちヘラケズリが施された須恵器E－453坏（第８図２）、底部に回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリが施された須恵器E－467坏（第８図５）などである。

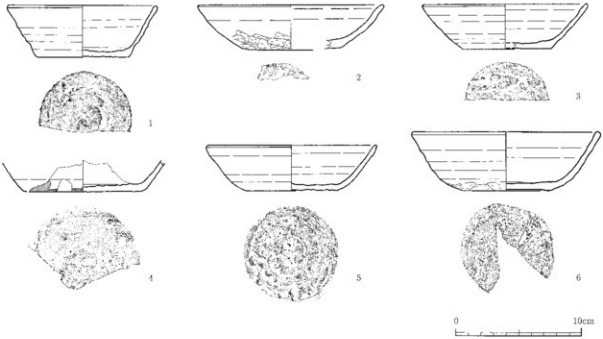
第７図　N7E1出土遺物

SD1951・1995溝跡を切り、SD2008・2018・2019溝跡に切られている。

SB2015掘立柱建物跡　桁行７間（総長19.6m、柱間寸法230～310cm）、梁行４間（総長8.8m、柱間寸法200～225cm）の南北棟で、南・北・西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の西桁行でN－1°－Wである。身舎の柱穴は一辺83～140cmの隅丸長方形で、柱痕跡は20～40cmの円形または楕円形である。廂の柱穴は一辺60～123cmの長方形で、柱痕跡は20～36cmの円形または楕円形


1　SB2010　N10E2柱穴

2　SB2010　N11E2柱穴



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	R-456	須恵器	坏	SB2010N5F1	抜き取り穴	器高4.1 口径12.0 底径7.6	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	口縁部・体部ロクロナデ		24
2	R-453	須恵器	坏	SB2010N10E2	抜き取り	器高3.6 口径4.7 底径7.8	口縁部・体部ロクロナデのち ヘラケズリ、底部ケズリ	口縁部・体部ロクロナデ		25
3	R-452	須恵器	坏	SB2010N10E2	抜き取り	器高3.6 口径13.1 底径7.0	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	口縁部・体部ロクロナデ		24
4	R-458	須恵器	坏	SB2010N9E2	抜き取り	残存高 (2.5) 底径9.6	体部ロクロナデ→ナデ 底部回転ヘラ切り→ヘラナデ→ナデ	体部ロクロナデ		26
5	R-467	須恵器	坏	SB2010N10E2	抜き取り穴	器高3.6 口径13.6 底径7.2	口縁部・体部ロクロナデ 底部ヘラ切り→回転ヘラケズリ	口縁部・体部ロクロナデ		27
6	R-454	須恵器	坏	SB2010N11E3	抜き取り穴	器高4.4 口径15.0 底径7.0	口縁部・体部ロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ	口縁部・体部ロクロナデ		23

第8図　SB2010　建物跡出土遺物

である。各柱穴掘り方や柱間寸法にややばらつきがある。柱穴の掘り方や柱痕跡は身舎が廂に較べやや大きくなっている。ほとんどの柱穴に抜き取り穴が見られるが、特に西桁列の抜き取り穴は掘り方底面に及んでいる。柱痕跡は木質の材が残っているもの（N2E5、N3E5、N5E5柱穴）がある。建物に廂が取り付く南・北・西外側にはさらに小柱穴列が付いている。小柱穴は直径27～40cm程の円形で、柱痕跡は10～14cmの円形である。

遺物は、柱穴の抜き取り穴N1E4から鉄滓、N4W2、N7E3から瓦片、各柱穴より土師器・須恵器小片が多量に出土している。

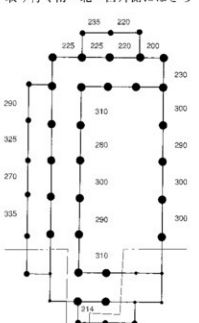
SA1910材木列、SD1995・1951・1952溝跡を切り、SD2002・2003・2009・2013・2031・2041溝跡に切られる。

SD1951溝跡　南北に延びる溝跡であり、上幅35～65cmである。南に隣接する第135次調査で検出したSA1951溝跡の延長部分と考えられる。方向はN－35°－Eで、検出した総長は27.5mである。遺構は検出に留めている。

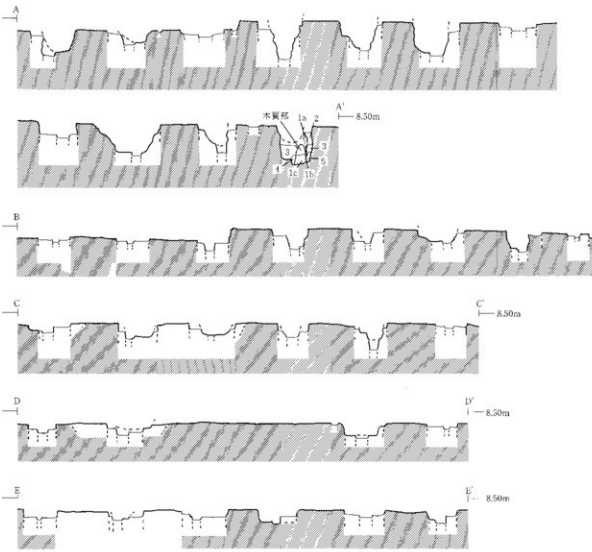
遺物は出土していない。

SB2010・2015掘立柱建物跡、SD1995・2003・2004・2009溝跡、SK2014土坑に切られる。

SD1952溝跡　南北に延びる溝跡であり、上幅35～60cmである。南に隣接する第135次調査で検出したSA1952溝跡の延長部分と考えられる。方向はN－35°－Eで、検出した総長は33mである。遺構は検出に留めている。



第9図　SB2015模式図



遺構名	層位	土色	土性	備考
N11E2	A－A'			
	1a	10YR3/2 黒褐色	粘土	
	1b	10YR5/1 褐灰色	粘土	
	1c	10YR2/1 灰以色	粘土	黒褐色粘土をやや含む（グライ化）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	以白色粘土をブロック状に含む
	3	10YR6/3 浅黄橙色	粘土質シルト	
	4	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰白色粘土をブロック状に含む（グライ化）
	5	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土	グライ化

0　4m

第10図　SB2010エレベーション図（1/100）

遺物は出土していない。

SA1910材木列、SB2015掘立柱建物跡、SD2000・2002・2003・2004・2013・2034溝跡に切られる。

SD2002溝跡　上幅110～260cm、底面幅30～100cm、断面形は緩平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN－0°－Eで、検出した総長は15.7mである。

遺物は須恵器、土師器、瓦片が少量出土した。

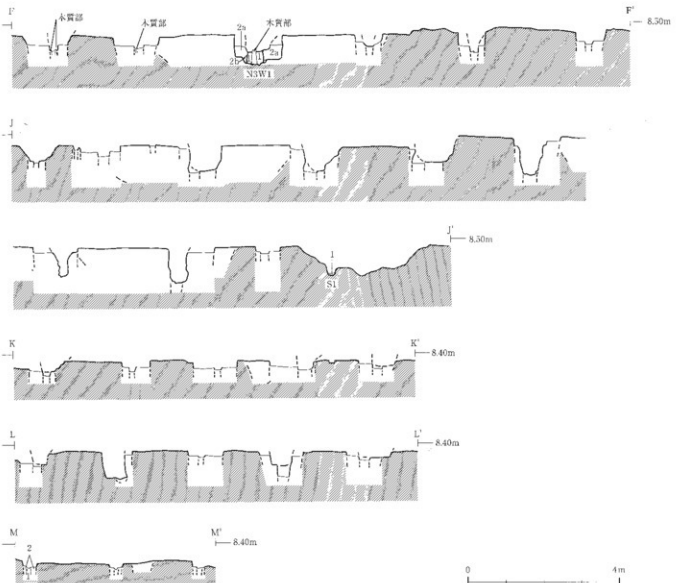
SB2015掘立柱建物跡、SA1910材木列、SD1952溝跡を切る。

SD2003溝跡　上幅85～115cm、底面幅は40～50cm程、断面形は逆台形または船底形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。方向はN－2°－Wで、南端から15.5mの地点で2方向に分岐し、N－39°－W方向へは3m延び調査区外へ、E－2°－N方向へはやや屈曲しながら7.2m延びている。

遺物は埋土より高台が付く須恵器坏、土師器・須恵器片が少量出土した。

SB2015掘立柱建物跡、SA1910材木列、SD1952溝跡を切る。

第11図　第138次調査区南端平面図（1/100）



遺構名	層位	土色	土性	備考
N3W2 H-H'				
	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化色粘土を斑状に含む
	2a	10YR7/3 にぶい黄色	粘土	褐灰色粘土を斑状に、炭化物をブロック状に含む
	2b	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘土	
S1 I-I'				
	1	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
F3 M-M'				
	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	白色粘土を少量を含む
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	

第12図　SB2015エレベーション図（1/100）

SD2004溝跡　上幅27～80cm、底面幅18～38cm、深さ５～30cmで、断面形は扁平なU字形あるいは舟底形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。方向はN－1°－Wで、検出した総長は12mである。堆積土は２層である。

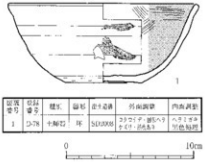
遺物は、土師器片、須恵器片が少量と散石の可能性がある礫が１点出土している。

SA1910杭列、SD1951・1952溝跡を切っている。

SD2008溝跡　上幅50～120cm、底面幅16～60cm、深さ2.5～43cmで、断面形は逆台形の溝跡である。壁は途中に

不規則な段を有し、底面はやや凹凸がある。方向はN－4°－Wで、検出した総長は9.5mである。堆積土は1層である。

遺物は、上部に円孔のあるK－249砥石（第24図6）、縦1.6cm、横2cmの範囲で凹部のあるK－252凹石（第24図7）が出土し、その他に堆積土中から須恵器の高台付坏や甕の小片、土師器小片、人頭大の礫、炭化物などが出土している。



図面番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	外面調整	内面調整
1	D-78	土師器	坏	SD2008	コラコイデ・顕著ヘラケズリ・黒色あり	ヘラミガキ黒色処理

第13図　SD2008溝跡出土遺物

SB2010掘立柱建物跡、SD1995・2036溝跡を切っている。

SD2009溝跡　上幅52～276cm、底面幅25～156cm、深さ5～35cmで、断面形は扁平な逆台形である。壁は東側のみ緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。方向はN－2°－Wで、検出した総長は13.2mである。堆積土は1層である。

遺物は、器厚が薄手で外面に炭化物が付着した土師器C－895甕（第24図3）、内面が黒色処理され外面にヘラケズリが顕著な土師器C－901鉢（第24図5）、内面黒色処理され底面に回転ヘラケズリが施されたロクロ使用の土師器D－77坏（第24図1）、内面黒色処理され体部外面に墨書（第13図）のあるロクロ使用の土師器D－78坏（第13図1）、外面に回転ヘラケズリ調整の顕著な須恵器E－460蓋（第24図4）、高さ10cm以上、口径5.6cm以上の須恵器E－461長頸壺頸部片（写真48）、縦16cm、横10cm、高さ12cmの台状のK－251礫石器（写真52）、その他堆積土中より土師器、須恵器の小片が多量に出土している。

SB2015掘立柱建物跡、SD1951・1995溝跡を切っている。

SD2012a・b溝跡　上幅58～190cm、底面幅14～32cm、深さ18～22cmで、断面形は扁平なU字形と推定される溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり西壁で平坦な段を有する。底面はほぼ平坦である。方向はN－8°－Eで、検出した総長は10.5mである。堆積土は3層である。二時期ある。

遺物は、これまで郡山廃寺から出土しているのと同様の特徴を有する単弁蓮華文軒丸瓦F－94（第24図8）、その他堆積土中より土師器、須恵器の小片が出土している。

SK2032・2033・2043土坑を切っている。

SD2018溝跡　上幅60～75cm、底面幅40～50cm、深さ27～34cmで、断面形はU字形である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN－5°－Wで、検出した総長は3.7mである。堆積土は3層である。

遺物は、土師器、須恵器の小片や礫が出土している。土師器の中にはロクロ使用の土師器片が少量含まれている。

SB2010掘立柱建物跡、土坑を切っている。

SD2019溝跡　上幅60～84cm、底面幅40～60cm、深さ26cm程で、断面形はU字形である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はやや凹凸がある。方向はN－9°－Wで、検出した総長は4.3mである。堆積土は3層である。

遺物は、底部が回転糸切り無調整の須恵器E－450坏（第24図2）、土師器、須恵器の小片が出土している。土師器の中にはロクロ使用の土師器片が少量含まれている。

SB2010掘立柱建物跡を切っている。

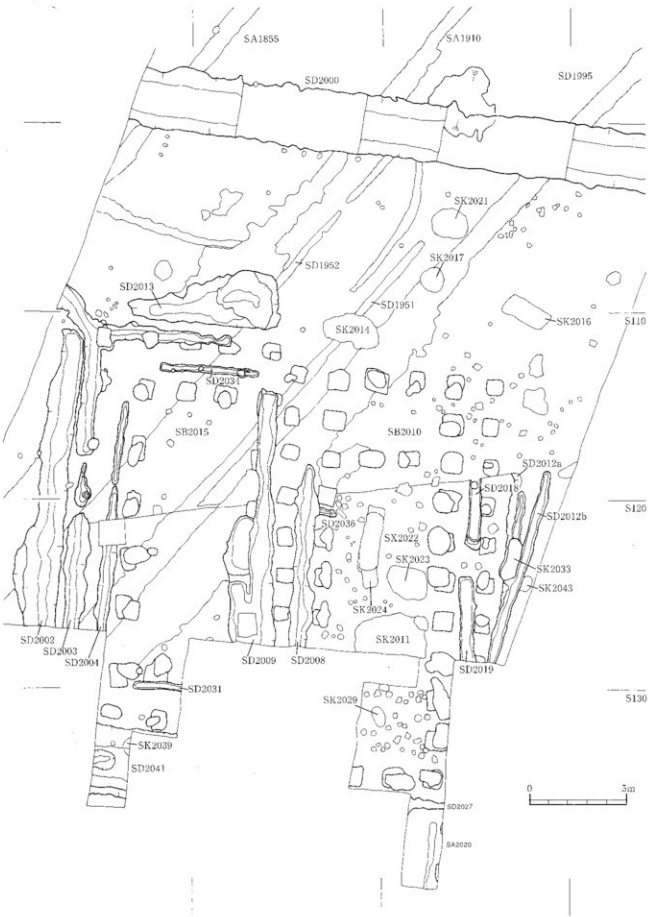
SD2027溝跡　上幅30～100cm、底面幅25cm程、深さ6cm程で、断面形は扁平な逆台形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。方向はE－5°－Nで、検出した総長は1.9mである。堆積土は1層である。

遺物は、土師器、須恵器の小片が少量出土している。

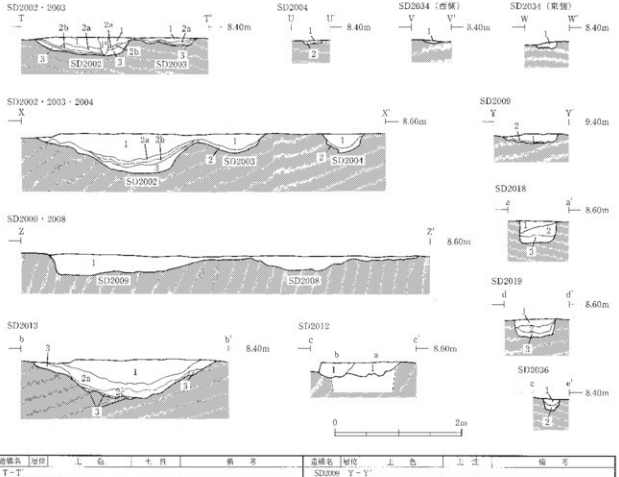
SD2031溝跡　上幅35～50cm、底面幅25～35cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はやや凹凸がある。方向はE－1°－Nで、検出した総長は2.6mである。

遺物は出土していない。

SB2015掘立柱建物跡を切る。



第14図　第138次調査区溝跡配置図（1/200）



遺構名	層位	土色	土性	備考
T－T'				
SD2002	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	2a	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	マンガン粒、火山灰を微量に含む
	2b	10YR7/1 灰白色	火山灰	
	3	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土を含む
SD2003	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	2a	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	マンガン粒、火山灰を微量に含む
	3	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土を含む
Pit	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物を微量に含む
SD2004	V－V'			
	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	褐色土を含む（貼床）
SD2034（西側）	W－W'			
	1	10YR5/1 褐灰色	シルト	白色粘土・黒色土を含む
SD2034（東側）	W－W'			
	1	10YR5/1 褐灰色	シルト	白色粘土・黒色土を含む
X－X'				
SD2002	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	SD2003との切り合いなし
	2a	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	マンガン粒、火山灰を微量に含む
	2b	10YR7/1 灰白色	火山灰	
	3	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土を含む
SD2003	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	2	10YR6/1 褐灰色	火山灰	
SD2004	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	褐色土を含む（貼床）

遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2009	Y－Y'			
	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
	2	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	黒褐色粘土を含む
SD2009・2008	Z－Z'			
	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	SD2002、SD2003と同様の堆積
SD2018	e－e'			
	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物を微量に含む
	2	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	
	3	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土	黒褐色粘土を少量含む
SD2019	d－d'			
	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物を微量に含む
	2	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	
	3	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土	黒褐色粘土を少量含む
SD2013	b－b'			
	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	2a	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	マンガン粒、火山灰を微量に含む
	2c	10YR4/1 褐灰色	粘土	火山灰を縞状に多量に含む
	3	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土を含む
c－c'				
SD2012a	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	マンガン、炭化物を含む
SD2012b	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
SD2006	e－e'			
	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	褐黄色粘土をブロック状に含む

第15図　第138次調査区遺跡断面図（1/60）

SD2034溝跡　上幅35～40cm、底面幅18～28cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。方向はE－2°－Nで、検出した総長は5.1mである。

遺物は出土していない。

SA1910材木列、SD1952を切る。

SD2036溝跡　上幅16～40cm、底面幅8～14cm、深さ18cm程で、断面形はU字形である。壁は南壁は直立気味に、北壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE－4°－Sで、検出した総長は1.1mである。堆積土は2層である。

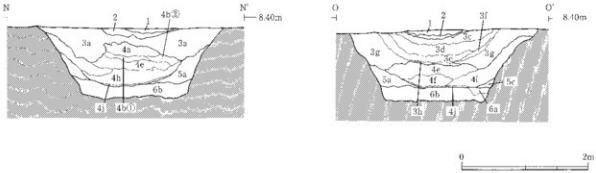
遺物は、両面黒色処理の土師器片、須恵器甕片が各1点、他に礫が少量出土している。

SD2008溝跡に切られている。

SD2000溝跡　調査区を東西に横断する溝跡である。上幅300～340cm、底面幅160～170cm、深さ120cm程、断面形は逆台形の溝跡であり、おおむね平坦である。第65次調査で発見されたSD984溝跡や第124次調査で発見されたSD1860溝跡と連続する可能性のある遺構である。方四町Ⅱ期官衙外郭大溝と心々で48～50m離れて平行している（註1）。方向はE－0°－S（真東西）で、検出した総長は29.8mである。

遺物は第1層より底部に回転糸切り痕跡が観察される土師器坏、鉱滓、鉄片、第3層より凸面調整が擦り消されたF－95丸瓦（第17図6）、焼け面のある礫石器、第4層上面より内面が黒色処理され体部中央部に段を持つ土師器C－897坏（第17図1）、第4層中より内面がハケメ調整された長胴型の土師器C－900甕（第17図4）、底部に手持ちヘラケズリされた須恵器E－454坏（第17図3）、第6層より縄文土器A－4鉢（第17図2）、直径0.3cm程の孔のあるK－250有孔石製品（第17図5）、カエリの有る須恵器蓋などが出土した。その他堆積土中より須恵器、土師器小片が多量に出土している。

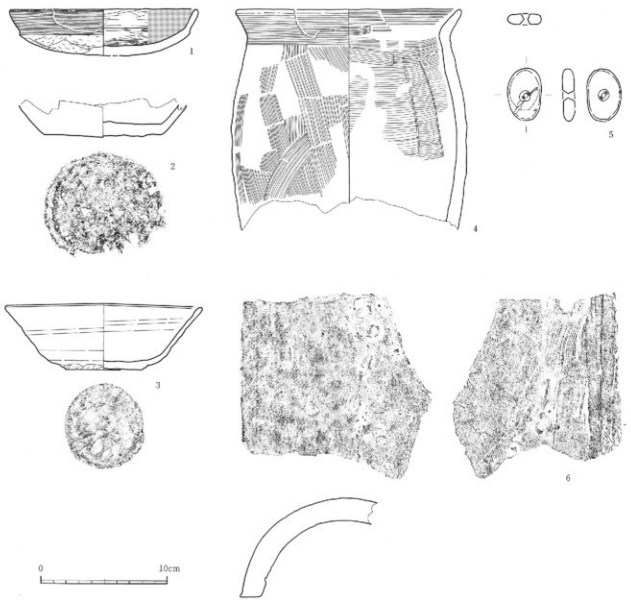
SA1855・1910材木列、SD1952・1995溝跡を切る。



遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2000	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	2	10YR6/2 灰黄褐色	火山灰	「灰色火山灰」
	3a	10YR5/1 褐灰色	粘土	細かくマンガン粒を含む
	3b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	（第4図参照）
	3c	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土を小ブロックで含む
	3d	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	3e	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	3f	10YR4/2 灰黄褐色	砂質粘土	褐色土を全体に細かく含む
	3g	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土（Ⅳ層）を小ブロックで含む
	3h	5Y4/1 灰色	粘土	明黄褐色粘土を小ブロックで含む、地盤集が顕著である
	4a	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	4b①	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	4b②	10YR5/1 褐灰色	粘土	3a層に炭粒、焼土を微量に含む
	4c	10YR7/6 明黄褐色	粘土	Ⅳ層と黒褐色粘土（第4図参照）
	4d	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	（第4図参照）
	4e	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	
	4f	5Y5/1 灰色	粘土	
	4g	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	明黄褐色粘土（Ⅳ層）を含む（第4図参照）

遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2000	4h	2.5Y7/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色、黒褐色粘土が細かく混合している
		10YR3/1 黒褐色	粘土	
	4i	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色、黒褐色粘土とにぶい黄橙色シルトの混合層
		10YR3/1 黒褐色	粘土	
		10YR7/4 にぶい黄橙色	シルト	
	4j	5Y3/1 オリーブ黒	粘土	
	5a	10YR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色粘土とにぶい黄橙色シルトの混合層
		10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	
	5b	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	
	6a	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土がまじる
	6b	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	黒褐色粘土、灰色粘土を含む（グライ化）

第16図　SD2000溝跡断面図（1/60）



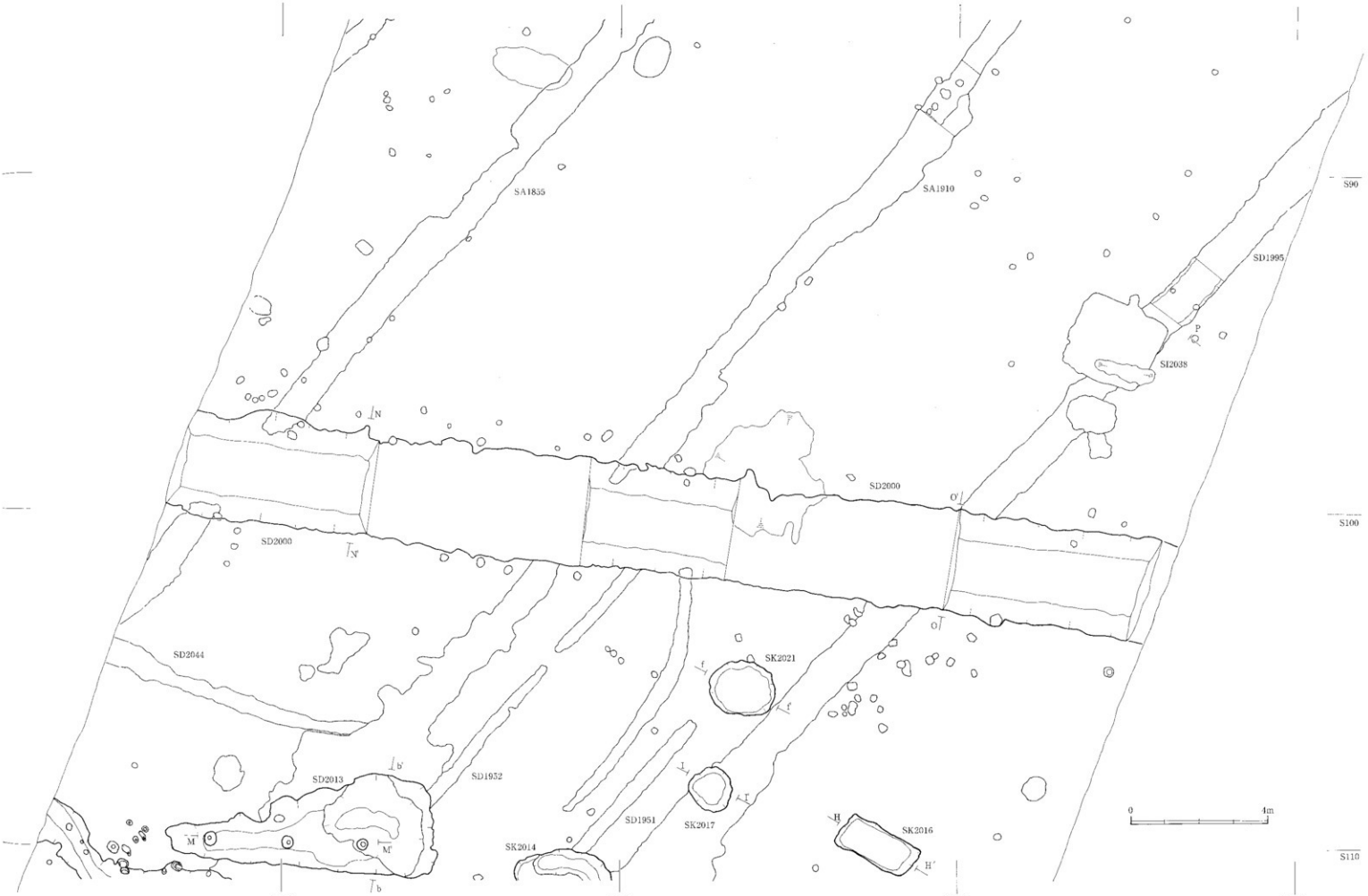
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	C897	土師器	坏	SD2000	1	器高3.6 口径14.9 底径13.4	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部・体部ヘラミガキ	内面漆色処理	42
2	A-4	縄文器	鉢	SD2000北端部	底面	残存高3.0 底径9.4	体部ミガキ、底部ヘラケズリ	体部・底部ナデ		
3	E-454	須恵器	坏	SD2000	4	器高5.2 口径13.6 底径6.0	口縁部・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	口縁部・体部ロクロナデ		41
4	C-900	土師器	甕	SD2000	4	器高17.6 口径17.8	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ハケメ、体部ヘラナデ		37
5	K-255	石製品	紡錘車	SD2000	6	長5.42 横幅2.8 厚0.95	穴に回転ケズリ痕有			39
6	F-95	瓦	平瓦	SD2000	3		凸面ヘラ消し、凹面糸切りのち布目痕、ケズリ			36

第17図　SD2000溝跡出土遺物

SD2013溝跡　上幅90～300cm、底面幅40～160cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は西側は平坦であるが、東側は土坑状に落ち込みがある。方向はE－9°－Nである。検出した総長は8.0mである。

遺物は、鉄製品N－111鋤先（写真38）、関東系土師器坏、その他土師器、須恵器片が少量出土した。

SB2015掘立柱建物跡、SA1910材木列、SD1952溝跡を切る。



第18図　第138次調査区中央平面図（1/100）

SD2041溝跡　上幅350～370cm、底面幅150～170cm、断面形は船底形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦であるが西壁ぎわに土坑状の落ち込みがある。方向はE－1°－Sで、検出した総長は4.3mである。

遺物は出土していない。

SB2015掘立柱建物跡・SK2039土坑を切る。

SD2044溝跡　東西に延びる溝跡であり、上幅35～70cm、方向はE－14°－Sであるが東端では弧状となる。検出した総長は8.0mである。遺構は検出に留めている。

遺物は出土していない。

SA1910材木列に切られる。

SI2038竪穴遺構　東西2.6m、南北2.4mで、東辺での方向はN－19°－Eである。深さ5cmで貼床状の粘土が検出されているが、北辺上の40cm程の突出は加熱を受けた痕跡がなく、カマドとは認められない。遺構の一部を調査するに留めている。

SD1995溝跡を切っている。遺構の一部が撹乱により削平されている。

SK2011土坑　調査区の南壁ぎわで検出し東西3.7m、南北2.2m以上の土坑で、深さは16～35cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、北側の一部に溝状に落ち込む箇所（i－i′）がある。堆積土は3層である。

遺物は、ロクロ使用の土師器片、須恵器片が多量に出土している。

SK2028土坑、小柱穴を切っている。

SK2014土坑　長軸3.1m、短軸1.4～1.7mの土坑で、深さは7～30cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は北側が窪んで深くなっている。堆積土は2層である。

遺物は、土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SD1951・1955溝跡を切っている。

SK2016土坑　長軸2.34m、短軸1.4mの長方形の土坑で、深さは30～40cmである。壁は東壁のみ緩やかに立ち上がりその他の壁は直立気味となる。底面はやや凹凸がある。堆積土は4層である。

遺物は、土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SK2017土坑　長軸1.3m、短軸1.2mの土坑で、深さは9～14cmである。壁はきわめて緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。堆積土は1層である。

遺物は出土していない。

SD1995溝跡を切っている。

SK2021土坑　長軸1.95m、短軸1.55mの土坑で、深さは7～10cmである。壁はきわめて緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は1層である。

遺物は、土師器小片が2点、須恵器小片が6点出土している。

SX2022　長軸3.3m、短軸0.95～1.1mの長方形で、深さは45～50cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層である。堆積土中に炭化物を多量に含む箇所がある。

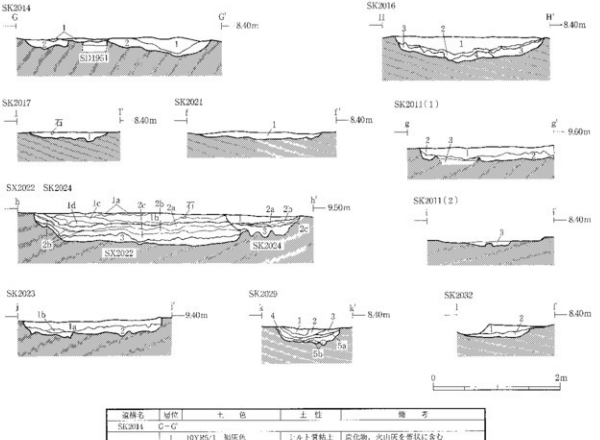
遺物は、土師器、須恵器片が出土している。

SK2024土坑に切られている。

SK2023土坑　東西2～2.2m、南北1.1～1.7mの土坑で、深さは15～26cmである。壁は直立気味に立ち上がり、底面はピット状の凹凸がある。堆積土は2層である。

遺物は、土師器、カエリのない蓋や糸切り痕のある坏底部片を含む須恵器片が出土している。

SK2024土坑　東西0.7m、南北1.2mの土坑で、深さは25～35cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が



遺構名	層位	土色	土性	備考
SK2014	C-C'			
	1	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物、火山灰を微状に含む
	2	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	
SK2016	H-H'			
	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	橙色粘土をブロック状に含む
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	3	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘土	
	4	10YR8/3 浅黄橙色	粘土	
SK2017	I-I'			
	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	白色粘土をブロック状に少量含む
SK2021	f-f'			
	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	
SK2011	g-g' i-i'			
	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	粘土、炭化物を含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む。1層よりやや暗い
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	炭化物を少量含む
SX2022	h h'			
	1a	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	
	1b	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物を下面に帯状に含む
	1c	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	
	1d	10YR5/4 黄橙色	粘土	褐灰色粘土をブロック状に含む
	2a	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物、マンガンを少量含む
	2b	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土を少量含む
	2c	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物、マンガンを多量に含む
	3	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土を少量に含む
SK2024	1	10YR3/1 褐灰色	粘土質シルト	炭化物、焼土を少量含む
	2a	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物、焼土を下面に帯状に含む
	2b	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
	2c	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	3	10YR3/1 褐灰色	粘土	炭を少量含む
SK2023	j-j'			
	1a	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物、黄褐色粘土を少量含む
	1b	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物を少量含む
	2	10YR2/1 黒 色	粘土	黄橙色粘土をブロック状に含む
SK2029	k k'			
	1	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	焼土を少量含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物、焼土を少量含む
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土	焼土を少量含む
	4	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘土	
	5a	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物を少量含む
	5b	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄橙色粘土をブロック状に含む
SK2032	l-l'			
	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物、明黄褐色粘土を少量含む

第19図　第138次調査区土坑他断面図（1/60）

ある。堆積土は3層で、焼土、炭化物を含んでいる。

遺物は、長さ13cmKの釘状の鉄製品N－112（写真40）、底部が回転ヘラ切りの坏片を含む須恵器片、土師器小片が出土している。

SX2022を切っている。

SK2028土坑　調査区の南壁ぎわで検出し東西0.84～1.16m、南北1.7m以上の土坑で、深さは10～50cmである。壁は直立気味に立ち上がる。底面は北側では浅く平坦となり、南側のみ深くなっている。堆積土は1層である。

遺物は、須恵器E－462高坏の脚部片（写真51）、その他土師器、須恵器片が少量出土している。

SK2011土坑に切られている。

SK2029土坑　調査区南端の拡張部で検出し長軸1.0m、短軸0.62mの土坑で、深さは22～26cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は苦しく凹凸がある。堆積土は5層で、焼土を含む層がある。

遺物は、土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SK2032土坑　調査区の東壁ぎわで検出し東西1.1m、南北1.3mの土坑で、深さは20cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層である。

遺物は、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリされた平底の須恵器E－457坏（第25図6）、その他土師器、須恵器片が出土している。

SD2012溝跡に切られている。

SK2033土坑　調査区の東壁ぎわで検出し東西0.7～1.1m、南北2.5mの土坑で、深さは16cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、底面の一部に樹根により撹乱を受けた箇所がある。堆積土は1層である。

遺物は、ロクロ使用の土師器甕片、その他土師器、須恵器片が出土している。

SD2012溝跡に切られている。

SK2039土坑　調査区南端拡張部壁ぎわで一部を検出した。東西0.4m以上、南北1m以上の土坑であるが、詳細は不明である。

遺物は出土していない。

SD2041溝跡に切られる。

SX2042　長軸6.3m、短軸2.1～3mの不整形である。白色のシルト質粘土が堆積し、その下部に酸化鉄が集積している。遺構の検出のみにとどめている。

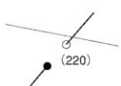
SK2043土坑　調査区の東壁ぎわで検出し長軸0.9m、短軸0.5～0.6mの土坑である。壁が加熱を受けて、焼土化している。遺構の検出のみにとどめている。

SD2012溝跡に切られている。

SA2020柱列　調査区南端拡張部分で一部を検出した遺構である。方向は南北列（柱穴掘り方西辺）でN－0°－Eである。柱穴は一部のみの検出であるが、一辺60～85cm以上の隅丸方形と推定される。遺構は検出に留めている。

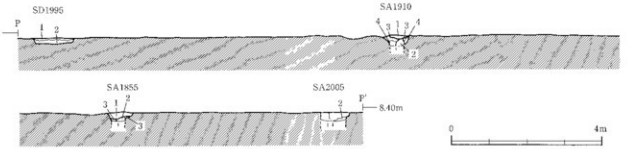
遺物は出土していない。

SB1990門跡　SA1855材木列跡の北端部で材木列の掘り方が拡がって検出された。拡がった部分は25×50cmの隅丸方形を呈し、抜き取り穴を伴っている。南側での底面には、直径20cm程の柱痕跡が検出された。北側の抜き取り穴底面での柱痕跡の推定位置からの柱間寸法は220cm（推定）であり、通り間となっていると考えられる。



第20図　SB1990模式図

SD1995溝跡　上幅110～350cm、底面幅100cm程、深さ15cm程、断面形は逆台形の溝跡である。壁はやや直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。方向はN－36°－Eで、検出し



遺構名	層位	土色	土性	備考
SD1995				
	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	
	2	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	
SA1910				
抜き取り穴	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	
柱痕跡	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	
掘り方埋土	3	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	
	4	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土	

遺構名	層位	土色	土性	備考
SA1855				
抜き取り穴	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄橙色粘土をブロック状に含む
柱痕跡	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄橙色粘土をブロック状に含む
掘り方埋土	3	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	黒褐色粘土をブロック状に含む
SA2005				
抜き取り穴	1	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	黒褐色粘土を含状に含む
掘り方埋土	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	

第21図　SD1995・SA1910・SA1855・SA2005断面図（1/100）

た総長は57.5mである。南に隣接する第135次調査では、溝跡が延長する部分でSD1957→SD1958への変遷が確認されている。本調査区では遺構を確認したに留めたため二条の溝跡の重複については詳細を明らかにできなかった。

遺物は出土していない。

SD1951を切り、SB2010・2015掘立柱建物跡、SD2000・2008・2009溝跡、SI2038竪穴遺構、SK2014・2017土坑に切られる。

SA1855材木列　南北に延びる材木列であり、南に隣接する第135次調査で検出したSA1855材木列跡の延長部分と考えられる。上幅40～300cmで、抜き取り溝底面で、掘り方とそのほぼ中央部に直径15～20cmの柱痕跡を検出した。上幅の拡がっている箇所は抜き取り溝の残存と推定される。方向はN－34°－Eで、検出した総長は約53mである。

遺物は出土していない。

SD2000溝跡に切られる。

SA1910材木列　南北に延びる材木列であり、南に隣接する第135次調査で検出したSA1910材木列の延長部分と考えられる。調査区北端ではやや屈曲気味となる。方向は南半部ではN－33°－Eである。上幅50～435cmで、抜き取り溝底面で、掘り方とそのほぼ中央部に直径20～35cmの柱痕跡を検出した。北端部でSA2001材木列T字に接続している。南に隣接する第135次調査では材木列に先行する溝跡が確認されているが、本調査区も掘り方上面では柱痕跡が検出されず、布掘りの幅も一定していないため抜き取り溝が伴っていると考えられる。検出した総長は80mである。

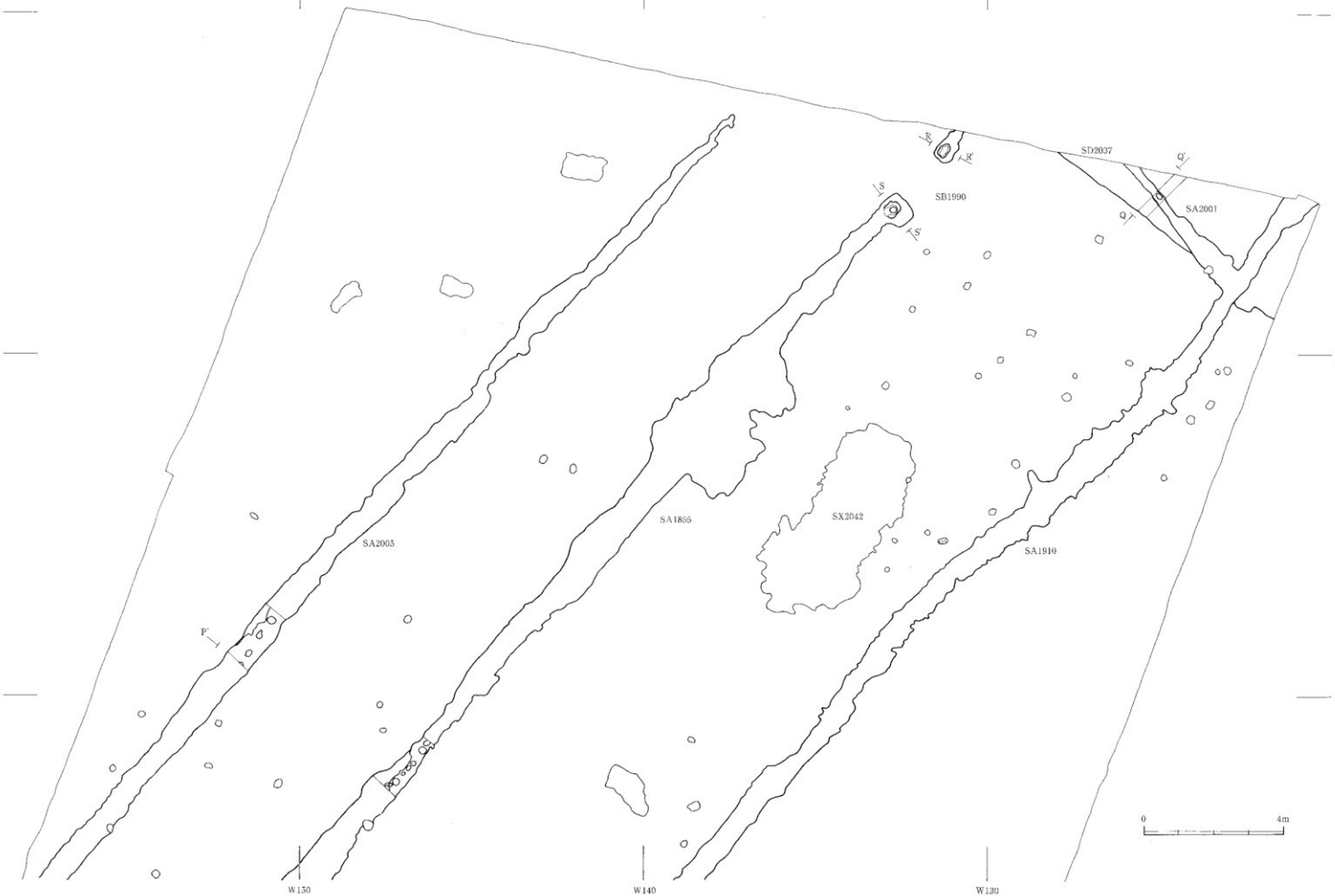
遺物は抜き取り溝より、凸面に突帯剥離痕跡が有り、竪状の刺突痕跡があるE－470不明品（写真32）、横ナデが施された小型の土師器C－898甕（第25図3）が出土している。

SD1952・2037・2044溝跡を切り、SB2015掘立柱建物跡、SD2000・2002・2003・2004・2013・2034溝跡に切られる。

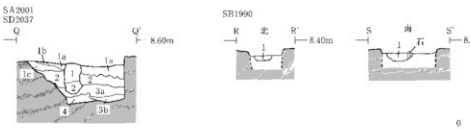
SA2001材木列　東西に延びる材木列であり、上幅22～70cmで、抜き取り溝底面で、そのほぼ中央部に直径15～20cmの柱痕跡を検出した。方向はE－42°－Sで、検出した総長は3.7mである。SA1910に接続している。

遺物は出土していない。

SD2037を切る。



第22図　第138次調査区北端平面図（1/100）



遺構名	層位	土色	土性	備考
SA2001	1	10YR6/4 にぶい黄色	粘 土	
	2	10YR6/1 褐灰色	粘 土	酸化鉄を含む
SD2037	1a	10YR2/1 にぶい黄色	砂土質シルト	酸化鉄をブロック状に含む
	1b	10YR5/3 灰黄褐色	粘 土	
	1c	10YR5/1 褐灰色	粘 土	にぶい黄色粘土をブロック状に含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘 土	1層より堅い
	3a	10YR8/2 灰白色	粘 土	酸化鉄を多量に含む
	3b	10YR8/2 灰白色	粘 土	
	4	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘 土	酸化鉄を少量含む

遺構	土色	土性	備考
SB1990 北、南			
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む

第23図　SA2001・SD2037・SB1990断面図（1/60）

SA2005材木列　南北に延びる材木列である。上幅12～90cmで、抜き取り溝底面で、材木列の掘り方とそのほぼ中央部に直径15～25cmの柱痕跡を検出した。方向はN－34°－Eで、検出した総長は約31mである。

遺物は出土していない。

SD2037溝跡　上幅350cm以上、底面幅90cm以上、深さ60cm程で、断面形は逆台形の溝跡であると推定される。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面は平坦である。方向はE－30°－S（N－35°－E）で、検出した総長は8mである。堆積土は4層である。

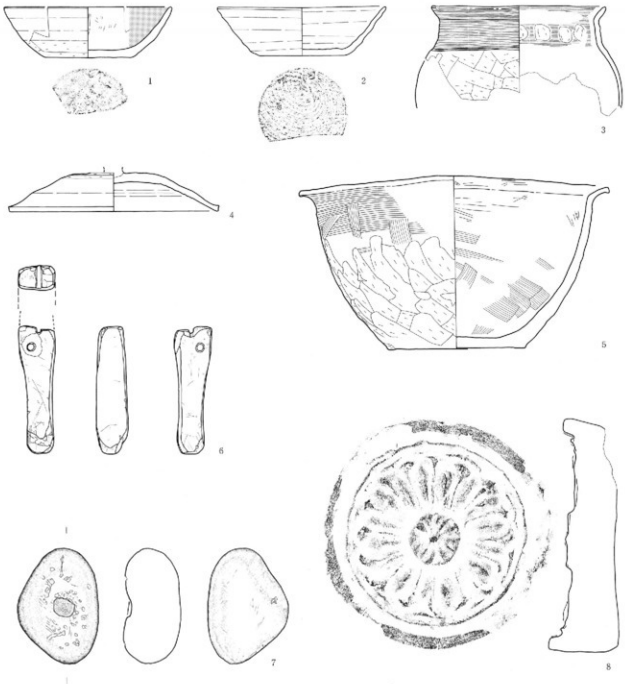
遺物は、出土していない。

SA2001材木列に切られている。

その他第1層より内面が黒色処理され口縁端部に膨らみをもつ土師器C－894坏（第25図2）、口縁部から体部にかけての屈曲が明瞭な関東系土師器C－896坏（第25図1）、転用硯の可能性が有り、底部が回転ヘラケズリされた須恵器E－455高台付坏（第25図4）、中央部に孔が有り円形なN－102不明品、古銭N－101開元通宝（第25図8）、金属製品N－103連管頭部（写真60）、素焼きの土製品P－55人形の頭部（写真66）、第Ⅱ層より壺状の底部に脚を持つ須恵器E－463台付壺（写真55）、第Ⅱ層よりハケメ調整が施され体部が顕著に膨らむ土師器C－902甕（写真62）、底部が手持ちヘラケズリ調整された須恵器E－457坏（第25図6）、遺構検出面から底部が回転ヘラケズリされた須恵器E－459坏（第25図5）、脚部に透かし孔を持たない須恵器E－464高坏脚部片（写真63）、撹乱より斜格子叩き痕の有るG－110平瓦（第25図7）が出土している。

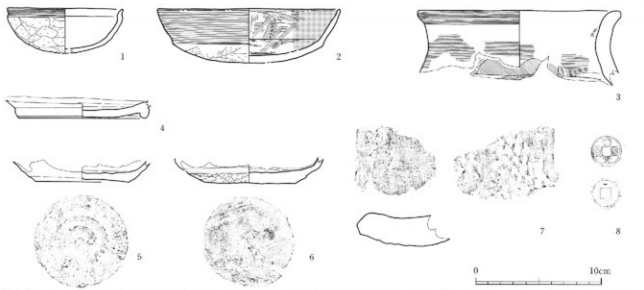
3．まとめ

今回の調査では方円町Ⅱ期官衙周辺の様相究明を目的として南方官衙西地区の調査を行った。調査開始前に想定していたように外郭の大溝に平行する溝跡（SD2000）、大型の建物跡（SB2010・2015）、Ⅰ期官衙東辺材木列（SA1855・1990）を発見できた。主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。なお並列関係は、必ずしも同時性を示すものではない。



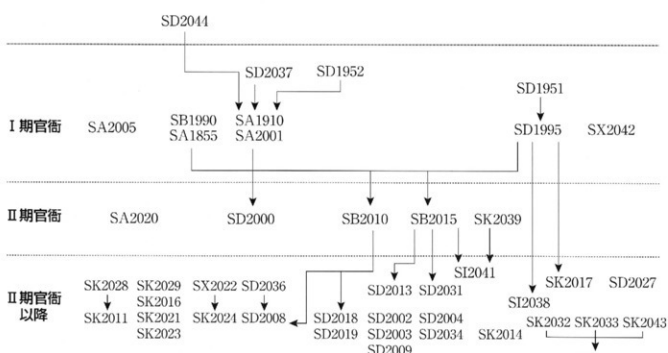
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	D-77	土師器	坏	SD2009		器高5.0 口径13.3 底径6.7	口縁部ヨコナデ 体部・底部回転ヘラナデ	口縁部・体部ミガキ	内面黒色処理	46
2	E-450	須恵器	坏	SD2019		器高3.9 口径13.4 底径7.9	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転糸切り	口縁部・体部ロクロナデ		54
3	C-405	土師器	壺	SD2009		残存高8.2 口径13.9	口縁部ヨコナデ 体部手持ちヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、 箱状圧痕、体部ミガキ		50
4	E-460	須恵器	蓋	SD2009		器高 (3.1) 器径 (16.6)	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ		47
5	C-001	土師器	鉢	SD2009		器高13.7 口径24.7 底径5.4	口縁部ヨコナデのちヘラナデ 体部・底部手持ちヘラケズリ	ヘラナデ→ミガキ	内面黒色処理	49
6	K-249	石製品	紡石	SD2008		長3.97 幅2.9 最大厚2.1				45
7	K-252	石製品	当石	SD2008		長3.83 幅6.5 最大厚4.5				44
8	F-94	瓦	軒丸瓦	SD2012	底面		単弁蓮華文		焼ズレあり	53

第24図　第138次調査区出土遺物(1)



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	C-896	土師器	坏	CIX	Ⅰ層	器高3.6　口径9.3　底径9.2	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	口縁部・体部ナデ		57
2	C-894	土師器	坏	表土		器高4.2　口径14.5　底径11.9	口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ	口縁部・体部ヘラミガキ	内面黒色処理	56
3	C-898	土師器	壷	SA1910		残存高5.9　口径16.2	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラナデ		
4	E-455	須恵器	高台付坏	表土		残存高1.6　底径10.2	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ		61
5	E-459	須恵器	坏	遺構検出面		残存高1.7　底径7.4	ロクロナデ、底部回転ヘラキリ	ロクロナデ		59
6	E-457	須恵器	坏	SK2032	Ⅱ	残存高2.1　底径6.9	体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ		58
7	G-110	瓦	平瓦	カクラン			凸面折格子叩き、ケズリ	凹面布目痕、ケズリ		64
8	N-101	金属製品	開元通宝	DIX	Ⅰ					65

第25図　第138次調査区出土遺物(2)



Ⅱ期官衙の調査としては、方四町Ⅱ期官衙の南外側にある南方官衙西地区内での調査にあたる。

SB2010掘立柱建物跡は桁行21m、梁行10.8mの東西に廂を有し、さらに間仕切りのある建物跡である。このような構造の建物は本遺跡内では第107次調査のSB1560掘立柱建物跡と同様な構造（註１）である。床面積（註２）は226.8㎡で、柱間の寸法からは桁行、梁行ともに７尺を基準に建築されたものと推定される。SB2010は仮想中軸線の東側に立地することから東に面して配置されていることが考えられる。

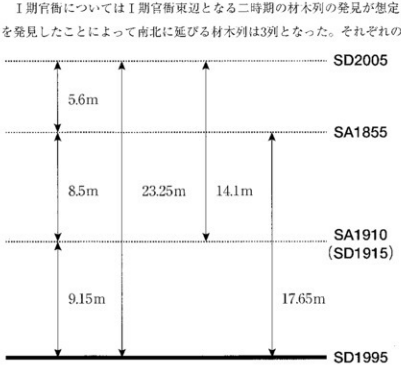
SB2015掘立柱建物跡は桁行19.6m、梁行8.8mの三面に廂を有し、さらにその外側に小柱穴列を伴う建物跡である。このような構造の建物は本遺跡内ではこれまでの調査では発見されていない。床面積は172.48㎡で、柱間寸法から桁行10尺、梁行7尺を基準に建築されたものと推定される。東側のみには廂を持っていないことから、東を背にし、西側を正面として配置されていると考えられる。

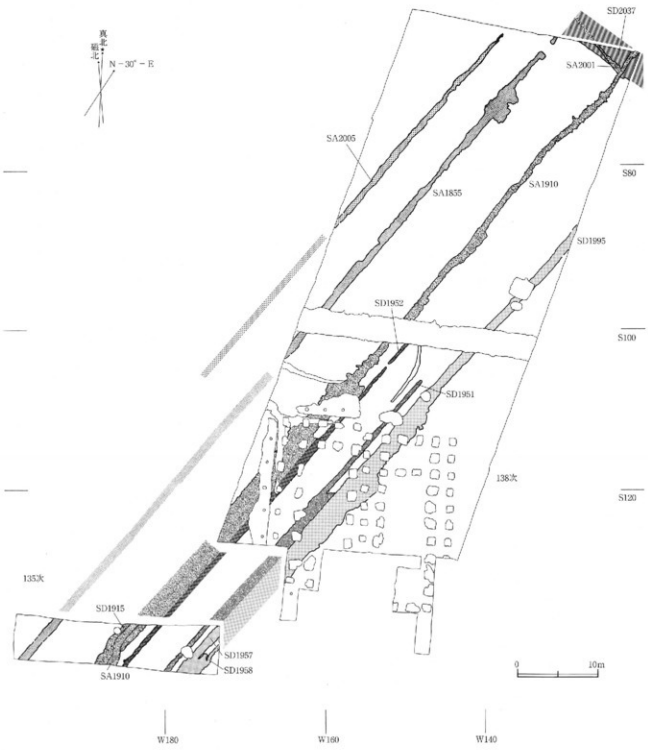
SB2010掘立柱建物跡とSB2015掘立柱建物跡は隣接地点での建替えも考えられるが、近接していることから同時存在することは考えにくい。機能的観点からもSB2010掘立柱建物跡は二面廂付建物であるのに対して、SB2015掘立柱建物跡は三面廂付建物であり、両者の機能が同様のものであったとは考えにくい。さらに建物の方向はSB2010掘立柱建物跡がN－3°－W、SB2015掘立柱建物跡はN－1°－Wであり、官衙中枢部では真北基準の建物から基準が西へやや傾く建物への変遷（Ⅱ－A期→Ⅱ－B期）することが確認されている（註4）。したがってSB2010掘立柱建物跡とSB2015掘立柱建物跡は、SB2015→SB2010への変遷が推察できる。しかし両建物の方向のずれは微妙であることから時期変遷については断定しがたいであろう。なお、掘立柱建物跡の柱根の樹種同定によって、SB2010・2015掘立柱建物跡ともにクリ材であることが判明した（註5）。

またこれらの建物跡の北には東西に延びるSD2000溝跡があり、Ⅱ期官衙の外郭大溝から48～49m離れ併行している（註6）。これまで方四町Ⅱ期官衙の周辺からは外郭大溝と併行する溝跡（註7）が発見されているが、今回の調査により、官衙の西や南の外側では規格的に設けられた区画溝であった可能性が高く、外郭の外に位置する「外溝」であったと考えられる。しかし北および東側についてはこれまで調査が行われていないことから、全体を大溝とともに二重に区画するかどうかについては今後官衙外周辺域の調査により検討していきたい。

今回調査した南方官衙地区は、SD2000溝跡を境にその南には廂付建物や規模の大きな建物が配置されていることが明らかになった。これは方四町Ⅱ期官衙のみならずその外側にも重要な官衙ブロックが広がっていたことを示しており、7世紀末～8世紀初めの地方官衙のあり方を考える上で重要な発見となった。また、この溝跡と外郭大溝との間にはⅡ期官衙に伴うと考えられる遺構が発見されなかったことから、Ⅱ期官衙の外側はさらに溝で区画され、その間は幅50m程の空閑地になっていたと考えられる。Ⅱ期官衙の外側に広がる空閑地は、藤原宮周辺のあり方にも類似した点であり、造営年代や官衙構造を検討する上で新たな視点を得たものと考えたい。

Ⅰ期官衙についてはⅠ期官衙東辺となる二時期の材木列の発見が想定されていたが、今回新たにSA2005材木列を発見したことによって南北に延びる材木列は3列となった。それぞれの材木列及びSD1995溝跡との距離関係は左図のとおりである。昨年度に行った第135次調査では、SA1910材木列に先行するSD1915溝跡が確認されている（註8）が、今回の調査では材木列と重複するⅡ期官衙の重要な建物跡が発見されたため、それらの遺構との関連から、Ⅰ期官衙の溝跡と材木列の調査は極一部のみ行った。なおⅠ期官衙南辺での調査（註9）によりSA1910→SA1855の変遷することが確認されている。今回のSA2005材木列、SD1995溝跡さらにSD1915溝跡をもふくめた変遷は、遺構相互の距離からだけでは明らかにできない。今後はこれらの遺構を踏まえて





第26図　第135次・第138次調査区Ⅰ期官衙遺構図

Ⅰ期官衙東辺、さらにはⅠ期官衙全体の様相を検討していく必要がある。

また遺物ではSA1910材木列の抜き取り溝より凸面に突帯剥離痕跡が有り、鏡状の刺突痕跡のあるE－470不明品（写真32）が出土している。外面調整はヘラナデ、内面調整はヘラナデ、ヘラケズリ調整されているが整形上の粗さが目立つ。焼成や胎土からは道具瓦に属するものであるのか、須恵器であるのか分類が困難である。このような特徴を持つ遺物はこれまで本遺跡で出土した遺物の中でも極めて特異であり、他の遺跡からも類例は見出し難い。色調もこれまで本遺跡から出土している鞴尾と比較して同一のものではない。鞴尾としてはその大きさから大槌に取り付くものとしては小さく、法隆寺所蔵の玉虫厨子のような古代の建物を縮小化したものに取り付く鞴尾としては大きすぎる。また形態からも突帯の上から穿孔を有しているが、鞴尾に孔は不必要であり、難波宮跡などで出土している「把手を有する鞴尾」と比較しても穿孔部は頂部につくことが多く、側面に穿孔を持つE－470不明品とは違いが見られる。さらに製作技法からも粘土紐を積み上げた時の掘口縁が観察できないことから大きさ・形態・製作技法いずれからも鞴尾とは考えにくいであろう（註10）。供恵器として見るならば形態の類似したものが大阪市細工谷遺跡出土遺物の中にある。用途不明の大型須恵器で高さ55.2cm、底部の径51.5cmで截頭円錐型の遺物で一方へ傾いたような形状に復元されている。体部下半より下寄りに把手をもち、底部外面に低い突帯が付く。製作技法や体部の厚さなど類似しているが、E－470不明品は全体像が何えないためそれとも断定はできないであろう（註11）。今後類例の蓄積を待って検討していきたい。

註1　仙台市文化財調査報告書第210集　「郡山遺跡ⅩⅥ　－平成7年度発掘調査概報－」1996

註2　ここでいう床面積は建物跡の桁行長と梁行長から算出された数値であり、建物の平面規模を表すために用いた用語であり、実際の復元構造を指すものではない。

註3　仙台市文化財調査報告書第145集　「郡山遺跡　－第84次・85次発掘調査報告書－」1990

註4　仙台市文化財調査報告書第210集　「郡山遺跡ⅩⅥ　－平成7年度発掘調査概報－」1996

註5　奈良文化財研究所　光谷拓実氏の御教示による。

註6　Ⅱ期官衙外郭大溝とSD2000外溝の関係については、「Ⅵ　総括」で若干の検討を加えた。

註7　郡山遺跡第65次調査SD984

仙台市文化財調査報告書第156集　「郡山遺跡　－第65次発掘調査報告書－」1992

第124次調査SD1860

仙台市文化財調査報告書第251集　「郡山遺跡　－第124次発掘調査報告書－」2001

第125次調査SD1826

仙台市文化財調査報告書第244集　「郡山遺跡ⅩⅩ　－平成11年度発掘調査概報－」2000

「郡山遺跡地区」第28回古代城柵官衙遺跡検討会資料集　2002

「郡山遺跡Ⅰ第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料集　2002

註8　仙台市文化財調査報告書第250集　「郡山遺跡21　－郡山遺跡・仙台平野の遺跡群　平成12年度発掘調査概報－」2001

註9　仙台市文化財調査報告書第160集　「郡山遺跡ⅩⅢ　－平成4年度発掘調査概報－」1993

註10　近畿大学文芸学部教授　大脇潔氏の御教示による。

註11　大阪歴史博物館　佐藤隆氏、大阪市文化財協会　横山洋氏、宮本佐知子氏、李陽浩氏の御教示による。

財団法人大阪市文化財協会　「大阪市天王寺区畑工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ」1999

3　第138次調査区全景（南より）

4　SB2015（手前）・SB2010（奥）

5　SB2015掘立柱建物跡（西より）

6　SB2010掘立柱建物跡（西より）

7　SB2015掘立柱建物跡（南より）

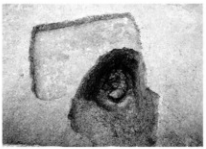
8　SB2010掘立柱建物跡（南より）

9　SD2000溝跡検出状況（西より）

10　SD2000溝跡全景（西より）

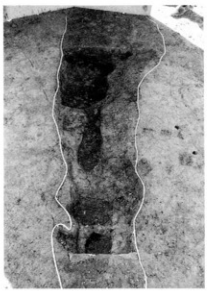
11　SD2000溝跡底面（東より）

12　SB2015掘立柱建物跡
N3W1（西より）

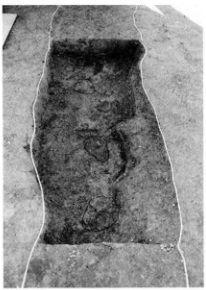


13　SB2015掘立柱建物跡
N7E4（東より）

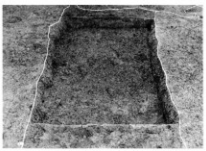
14　SB2010掘立柱建物跡
N11E2（北より）



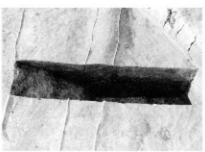
15　SA1855材木列
柱痕跡検出状況（北より）



16　SA2005材木列
柱痕跡検出状況（北より）



17　SD1995溝跡（北より）

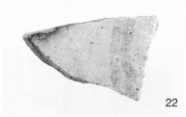


18　SA2001材木列・SD2037溝跡（東より）

19　第138次調査区北半全景（西より）

20

21


22

23

24

25

26

27

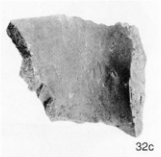
28

29

30

31

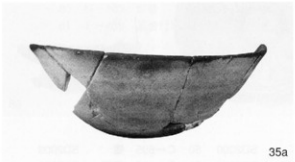
32b


32c

32a

33

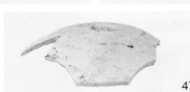
34


35a

35b

20　E－465　円面硯　SB2010N5E2抜き取り
21　E－456　坏　SB2010N6E1抜き取り
22　C－916　坏　SB2010N7E1柱痕跡
23　E－451　坏　SB2010N11E3抜き取り
24　E－452　坏　SB2010N10E2抜き取り
25　E－453　坏　SB2010N10E2抜き取り
26　E－458　坏　SB2010N9E2抜き取り
27　E－467　坏　SB2010N10E2抜き取り

28　E－466　蓋　SB2010N11E2抜き取り
29　N－109　釘　SB2010N4E6掘り方
30　N－110　釘　SB2010N3E3掘り方
31　N－108　釘　SB2010N6E5抜き取り
32　E－470　不明品　SA1910
33　K－253　鉱石　SB2010N11E3抜き取り
34　C－898　壺　SA1910
35　D－78　坏　SD2008・2009



36	F－95	丸瓦	SD2000 ℓ 3	43	A－4	鉢	SD2000	50	C－895	甕	SD2009
37	C－900	甕	SD2000 ℓ 4	44	K－252	凹石	SD2008	51	E－462	高坏	SK2028
38	N－111	鋤先	SD2013	45	K－249	砥石	SD2008	52	K－251	礫石器	SD2009
39	K－250	有孔石製品	SD2000 ℓ 6	46	D－77	坏	SD2009	53	F－94	軒丸瓦	SD2012
40	N－112	釘	SK2024	47	E－460	蓋	SD2009	54	E－450	坏	SD2019
41	E－454	坏	SD2000 ℓ 4	48	E－461	長頸瓶	SD2009	55	E－463	台付壺	II層
42	C－897	坏	SD2000 ℓ 4	49	C－901	鉢	SD2009				

56

57

58

59

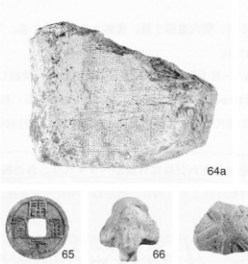
61b

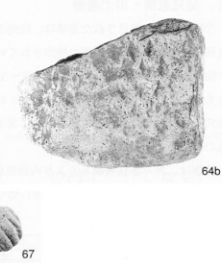
62

60

61a

63


64a


64b

65

66

67

56	C－894	坏	表土	62	C－902	甕	Ⅲ層
57	C－896	坏	Ⅰ層	63	E－464	高坏	Ⅲ層
58	E－457	坏	SK2032	64	G－110	平瓦	カクラン
59	E－459	坏	遺構検出面	65	N－101	開元通宝	Ⅰ層
60	N－103	煙管	Ⅰ層	66	P－55	人形	Ⅰ層
61	E－455	高台付坏	表土	67	P－53	人形	Ⅰ層

Ⅳ　第140次発掘調査

1．調査経過

第140次調査は、岩手県盛岡市青山４丁目１－１－203加藤雅祉氏より、仙台市太白区郡山３丁目202－１において住宅新築に伴う発掘届が、平成13年６月11日付けで提出されたことにより実施した。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を行った。調査は住宅の建つ部分を対象に東西10m、南北３mの調査区を設定し、平成13年７月４日より表土排除を行った。現況より深さ0.7m程で遺構を検出し、柱穴や溝跡などを検出した。遺構が南に延びているため、調査区の一部を南に拡張し、調査区は東西10m、南北４m程となった。埋め戻し、整地作業を含め、調査が終了したのは平成13年７月31日である。

2．発見遺構・出土遺物

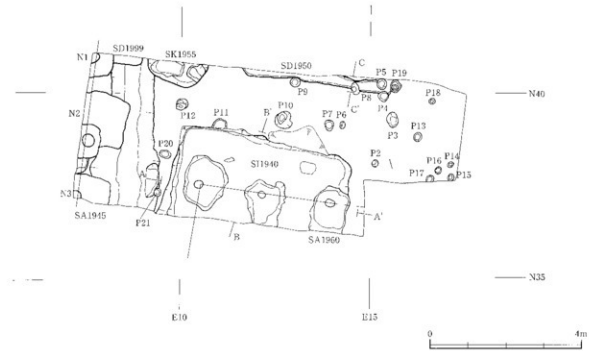
今回の調査で発見された遺構は、柱列２列、竪穴遺構１基、溝跡２条、土坑１基、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第Ⅱ層上面で検出されている。

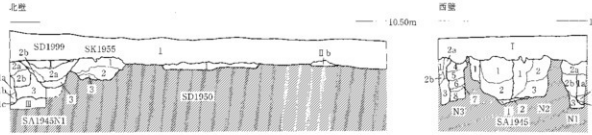
SA1945柱列　調査区の東端で、N－1°－E方向に延びる柱列を検出した。検出した総長は3.8mで、さらに南北方向に延びている。柱穴は100～120×140cm程の方形で、柱痕跡は35cm程である。柱間寸法は150・210cmである。柱穴の柱は全て切り取り痕跡がある。N２柱穴のみ２時期の重複が確認された。柱穴の埋土は、浅黄橙色や明黄褐色の粘土などである。

遺物は、N－２柱穴掘り方より内面黒色処理され、体部外面がヘラケズリされた椀形の土師器C－903（第29図１）が出土し、その他の柱穴掘り方、切り取り穴より土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SD1999溝跡に切られている。

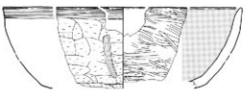
第27図　第140次調査区位置図





遺構名	層位	上色	土性	備考
両壁・北壁				
基本層位	I	10YR4/4 褐色	砂土質シルト	表土、ゴミ、砂利あり
	IIa	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土をまだらに含む
	IIb	2.5Y7/4 浅黄色	粘 土	褐色粘土質シルトを少量含む
	IIc	2.5Y7/4 浅黄色	粘 土	
	III	10YR7/6 明黄褐色	シルト	砂質土を含む
SA1943N3				
掘り方	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
	2a	10YR4/4 褐色	粘 土	浅黄橙色粘土をブロック状に含む
	2b	10YR4/4 褐色	粘 土	浅黄橙色粘土を多量に含む
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘 土	浅黄橙色粘土を多量に含む
	4	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む
	6	10YR7/6 黄橙色	粘 土	
	7	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	
	8	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘 土	
SA1945N2				
a 抜き取り	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	黄橙色粘土を斑状に含む
a 掘り方	1	10YR8/4 浅黄橙色	粘 土	黄灰色粘土を斑状に含む（柱痕跡）
	2	2.5Y6/4 黄灰色	粘 土	掘り方埋土
b 抜き取り	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	抜き取り痕跡
	2	10YR7/6 明黄褐色	粘 土	抜き取り痕跡
b 掘り方	1	10YR8/6 黄橙色	粘 土	褐灰色粘土を少量含む
	2	10YR8/3 浅黄橙色	粘 土	褐灰色粘土をブロック状に含む
	3	2.5Y6/1 黄灰	粘 土	褐灰色粘土を少量含む
SA1945N1				
	1a	10YR6/2 灰黄褐色	粘 土	柱痕跡
	1b	10YR5/1 褐灰色	粘 土	柱痕跡
	1c	2.5Y8/2 灰白色	粘 土	柱痕跡、下面にマンガン集積
	2a	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	抜き取り痕跡
	2b	10YR7/6 明黄褐色	粘 土	抜き取り痕跡
	3	10YR8/6 黄橙色	粘 土	暗褐色粘土を斑状に含む（掘り方）

第28図第140次調査区平・断面図（1/100）



0　10cm

図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 遺土遺構	層位	法　量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真掲載
1	C-903	土師器	坏	SA1945 N1	掘り方 2	残存高（6.4） 口径19.0 底径（13.0）	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ→部ミガキ	口縁部 体部ミガキ	内面黒色処理	68

第29図　第140次調査区出土遺物

SA1960柱列　調査区の東端で、E－1°－S方向に延びる柱列を検出した。検出した総長は3.5mで、さらに南と東の方向に延びていると推定される。柱穴は70～115×120cm程の不整形で、柱痕跡は18～20cmである。柱間寸法は180cmである。柱穴掘り方の底面付近のみが残存し、深さは6～16cm程である。柱穴の埋土は、にぶい黄橙色粘土である。

遺物は、E1、E2柱穴掘り方から土師器片が少量出土している。

SI1940竪穴遺構に切られている。

SI1940竪穴遺構　東西4.7m、南北2.4m以上で、北辺での方向はE－6°－S方向であるが、全体規模は不明である。底面までの深さは検出面より40cm程であり、底面に炭化物の集積する箇所がある。堆積土は3層である。

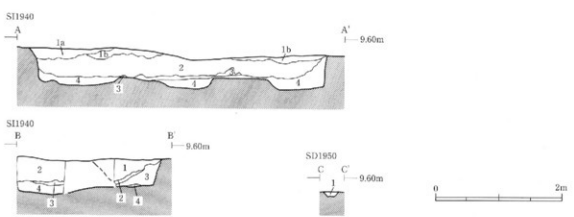
遺物は、N－104、106、107鉄滓（写真70－2、4、3）、その他に土師器、須恵器片、焼けた礫などが少量出土している。

SA1960柱列を切っている。

SD1950溝跡　上幅26～32cm、底面幅14～24cm、深さ10～20cm程で、断面形は逆台形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。方向はE－1°－Sで、検出した総長は4mである。堆積土は1層である。

遺物は、土師器の小片が1点出土している。

P4、5、8、19に切られている。



層位	土　色	土　性	備　考
SI1940　A～A'			
1a	10YR5/1　褐灰色	シルト質粘土	
1b	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	
2	10YR7/6　明黄褐色	粘　土	暗褐色粘土をブロック状に含む
3	10YR3/2　黒褐色	粘　土	炭化物、焼土を多量に含む
4	10YR7/4　にぶい黄橙色	粘　土	暗褐色粘土をブロック状に含む、SA1960柱穴残存
SI1940　B～B'			
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄橙色粘土を少量含む
2	10YR3/2　黒褐色	粘　土	炭化物、焼土を含む
3	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘　土	
4	10YR7/4　にぶい黄橙色	粘　土	暗褐色粘土をブロック状に含む
SD1950　C～C'			
1	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘　土	

第30図　第140次調査区遺構断面図（1/60）

SD1999溝跡　上幅112～160cm、底面幅35～68cm、深さ70cm程で、断面形は逆台形である。壁はきわめて緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN－4°－Wで、検出した総長は4mである。堆積土は3層で、底面に酸化鉄が集積している。

遺物は、椀形のN－105鉄滓（写真70－1）、土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SA1945柱列、SK1955土坑を切っている。

SK1955土坑　調査区の北壁ぎわで検出し東西1.6m、南北0.65m以上の土坑で、深さは55～60cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。堆積土は3層で、グライ化している箇所がある。

遺物は、土製品P－54羽口の先端部片（写真69）、土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SD1999溝跡に切られている。

3．まとめ

調査を実施した地点は、方四町Ⅱ期官衙の内部で中枢部の東側にあたる。これまで中枢部および外郭となる東辺部については調査が実施されてきた（註1）が、官衙内東半地区については、広範囲な調査が行なわれていない。今回の調査で発見されたSA1945柱列は、柱穴規模の点ではこれまで調査された官衙建物跡の柱穴と比較しても大形の類に属する。SA1945柱列については、柱間寸法が150cmと210cmと違いがあるのとN2柱穴掘り方のみ2時期あることから、複数の建物跡が重複しあっている可能性もある。調査区が狭小なため、詳細を明らかにすることはできないが、Ⅱ期官衙に属する大形の掘立柱建物跡の一部と考えられよう。また今回検出したSI1940竪穴遺構については、竪穴住居跡と同様の形状を呈しているが、貼床等の床面と断定する施設が確認できなかったことから、竪穴住居跡とはせず、用途不明の竪穴遺構としておく。

註1　周辺での官衙中枢部の調査は、第115次調査（郡山遺跡XⅦ－平成9年度発掘調査概報－）、第134次調査（郡山遺跡21－平成12年度発掘調査概報－）などで、東辺部での調査は、昭和54年度調査（年報1）、第11次調査（郡山遺跡Ⅱ－昭和56年度発掘調査概報－）、第117次調査（郡山遺跡XⅨ－平成10年度発掘調査）などである。

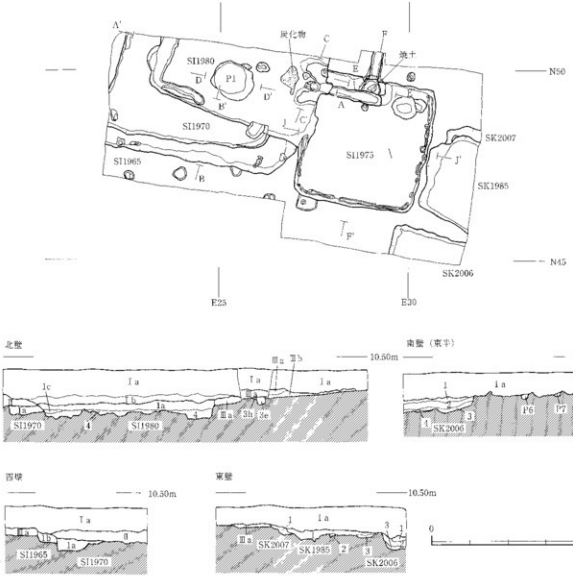
68

69

70

68　C－903　坏　SAI945N1掘り方ℓ2
69　P－54　羽口　SK1955

70－1　N－107　鉄滓　SI1940ℓ3
70－2　N－105　鉄滓　SI1999ℓ1
70－3　N－106　鉄滓　SD1940ℓ2
70－4　N－104　鉄滓　SI1940ℓ1



遺構名	層位	上　色	土　性	備　考
黒壁・南壁・東壁・北壁				
基本層位	Ia	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	旧耕作土、撹土
	Ib	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黄橙色粘土を斑状に含む
	II	10YR3/2 黒褐色	粘　土	黄橙色粘土を斑状に含む
	IIIa	10YR5/2 灰黄褐色	粘　土	黄橙色粘土をブロック状に含む
	IIIb	10YR7/6 明黄褐色	粘　土	
SI1970	1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘　土	
SI1980	Ia	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘　土	
	1c	10YR3/3 暗褐色	粘　土	
	3a	10YR5/2 灰黄褐色	粘　土	焼土をブロック状に含む
	3f	5YR5/8 明赤褐色	粘　土	焼土
	4	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
SK2007	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	焼土を少量含む
SK1985	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土、炭化物を含む
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘　土	黄橙色粘土、炭化物を含む
	3	10YR5/6 黄褐色	粘　土	灰黄褐色粘土を少量含む
SK2006	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘　土	炭化物を微粒に含む
	2	10YR3/1 褐灰色	粘　土	黄橙色粘土を斑状に含む
	3	10YR3/1 黒褐色	粘　土	炭化物を多量に含む
	4	10YR8/4 浅黄橙色	粘　土	
P6	1	10YR3/2 黒褐色	粘　土	
P7	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
SI1965	1b	10YR4/6 黄褐色	粘　土	褐灰色粘土をブロック状に含む

第32図　第142次調査区平・断面図（1/100）

Ⅴ　第142次発掘調査

1．調査経過

第142次調査は、仙台市太白区郡山３丁目６－５相原秀盛氏より、仙台市太白区郡山３丁目202－５において住宅新築に伴う発掘届が、平成13年７月27日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。調査は住宅の建つ部分を対象に東西10m、南北４mの調査区を設定し、平成13年８月１日より表土排除を行なった。現況より深さ0.5～0.8m程で竪穴住居跡や土坑などを検出した。埋め戻し、整地作業を含め、調査が終了したのは、平成13年９月３日である。

2．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡４軒、土坑３基、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第Ⅲ層上面で検出されている。

SI1965竪穴住居跡　東西５～5.25m、南北１m以上で、南辺での方向はＥ－３°－Ｓ方向である。全体の規模や形態は不明で、住居の掘り方を検出したと考えられる。掘り方底面までの深さは検出面より17～25cm程である。埋土は１層である。

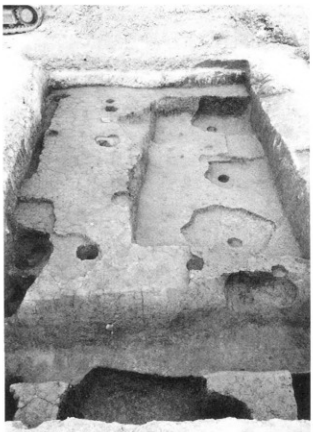
遺物は、土師器、須恵器片が少量出土している。

SI1970・1980竪穴住居跡に切られている。

SI1970竪穴住居跡　東西4.5m、南北2.65m以上で、西辺での方向はＮ－10°－Ｅ方向である。全体の規模や形態は不明で、住居跡の掘り方を検出したと考えられる。掘り方底面までの深さは検出面より35～47cm程である。埋土は２層である。

遺物は、土師器が少量と長さ30cm、幅10cmの礫が出土している。

第31図　第142次調査区位置図



71　第140次調査区全景（西より）

72　第140次調査区全景（東より）

73　第140次調査区南半拡張状況（東より）

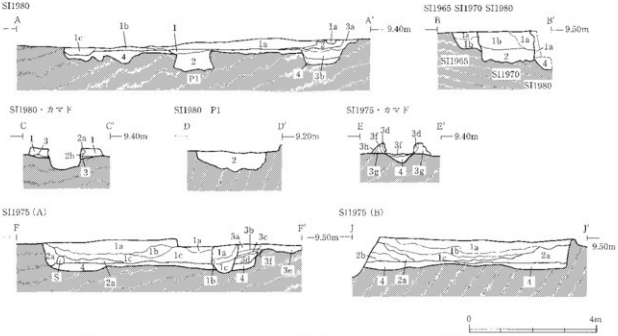
74　SD1999溝跡（南より）

SI1965竪穴住居跡を切り、SI1980竪穴住居跡に切られている。

SI1975竪穴住居跡　東西3.2m、南北3.4mのほぼ方形の竪穴住居跡である。北壁中央にカマドがあり、N－3°－E方向に煙道が0.8m以上延びている。カマドの燃焼部や煙道周辺が強く焼けている。また床面までの深さは検出面より17～25cm程である。床面上の東、西、南壁ぎわには、周溝状の落ち込みが巡っている。床面までの堆積土は、大別して2層である。

遺物は、第1層中からは内面黒色処理され外面もヘラミガキされた土師器C－904坏（第34図2）、内面黒色処理され外面に段のない丸底風の土師器C－906坏（第34図3）、内面が摩滅した土師器C－908坏（第34図1）、両面黒色処理された土師器C－909椀（第34図4）、C－910、911蓋あるいは皿（第34図5）、ススの付いた土師器C－912甕の底部片（第34図8）、外面ハケメ調整の顕著な土師器C－913鉢（第34図11）、外面ヘラケズリの施された土師器C－914甕（第34図9）、体部に最大径のある土師器C－915甕（第34図10）、須恵器E－468盤の 小片、竹状模骨痕跡の平瓦G－111（第34図12）などが出土している。第2層中からは、平底で墨痕のある須恵器E－469盤（第34図7）が出土している。

SI1980竪穴住居跡に切られている。

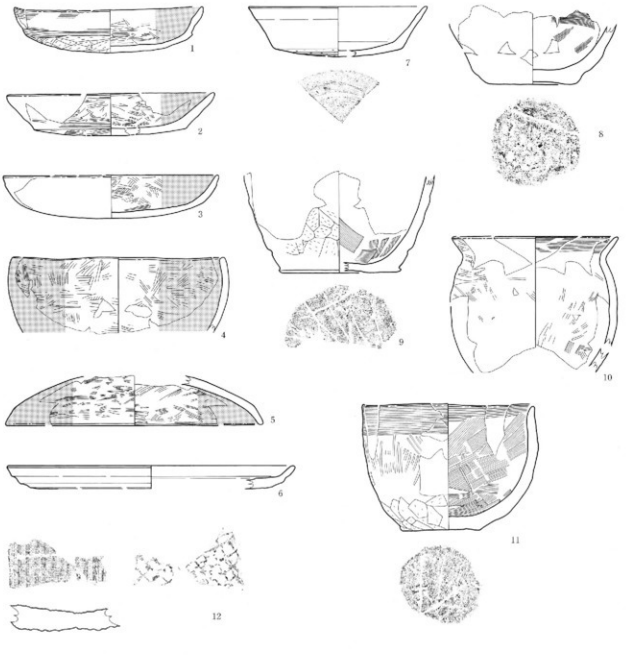


層位	上色	土性	備考
SI1980 A－A'			
1a	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	
1b	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	明黄褐色粘土を少量含む
1c	10YR3/3 暗褐色	粘土	
2	10YR8/6 黄橙色	粘土	焼土をブロック状に含む、カマド崩落土
3a	10YR2/1 黒色	粘土	炭化物、焼土を多量に含む
3b	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物、焼土を少量含む
4	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	
SI1980 カマド断面 C－C'			
1	10YR7/4 にぶい黄橙色	シルト	カマド構築土
2a	5YR6/8 橙色	粘土	焼土
2b	5YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物
3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	炭化物を少量含む、粘密
SI1980 P.1 D－D'			
1	10YR3/3 黒褐色	粘土	炭化物を少量含む
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒を斑状に含む
SI1975 F－F' J－J'			
1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黄橙色粘土をブロック状に含む
1b	10YR3/3 暗褐色	粘土	
1c	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物、焼土を少量含む
2a	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄橙色粘土を少量含む
2b	10YR3/2 黒黄褐色	粘土	黄橙色粘土を多量に含む
3a	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物、焼土を少量含む
3b	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土を少量含む
3c	5YR6/8 橙色	シルト	焼土
3d	10YR4/1 褐灰色	粘土	焼土を少量含む
3e	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	焼土をブロック状に含む
3f	5YR5/8 明赤褐色	粘土	焼土、カマドの土が焼けた
3g	10YR7/6 明黄褐色	粘土	カマドソデ、基本層位Ⅲb層
3h	7.5YR4/3 褐色	粘土	炭化物、焼土を含む
4	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土	褐色粘土を少量含む
SI1980 煙道 E－E'			
1a	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
1b	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	焼土を少量含む
1c	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	

SI1965・SI1970・SI1980 B－B'

遺構名		上色	土性	備考
SI1965	1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
	1b	10YR8/6 黄橙色	粘土	褐灰色粘土をブロック状に含む
SI1970	1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	1b	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	黄橙色粘土粒を斑状に含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む
SI1980	1a	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	

第33図　第142次調査区遺構断面図（1/60）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	層位	法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	C-008	土師器	坏	SI1975	1	器高3.4 口径14.2	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	体部ヘラケズ、ヘラミガキ	内面黒色処理	80
2	C-004	土師器	坏	SI1975	1	器高3.4 口径16.5 底径12.2	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ、体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部、体部ヘラミガキ	内面黒色処理	81
3	C-006	土師器	坏	SI1975	1	器高3.4 口径17		口縁部、体部ヘラミガキ	内面黒色処理	82
4	C-009	土師器	鉢	SI1975	1	残存高 6.0 口径16.8	口縁部・体部ケズリのちミガキ	口縁部、体部ミガキ	内面黒色処理	84
5	C-010	土師器	蓋	SI1975	1	器高2.9 口径20.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面黒色処理	83
6	E-468	須恵器	鉢	SI1975	1	器高1.8 口径22.8	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ？	ロクロナデ		86
7	E-469	須恵器	坏	SI1975	2	器高4.0 口径14.1 底径10.2	口縁部・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	口縁部・体部ロクロナデ	口縁外面に墨書	85
8	C-012	土師器	壺	SI1975	1	残存 高6.5 底径6.6	不明	ヘラナデ		89
9	C-014	土師器	甕	SI1975	1	残存高8.2 口底径9.6	ヘラケズリ、底部木葉痕	ヘラナデ		88
10	C-015	土師器	甕	SI1975	1	残存高10.8 口底径13.0	ヘラミガキ	ヘラナデのちヘラミガキ		90
11	C-013	土師器	鉢	SI1975	1	器高10.05 口径13.5～12.8	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ、胴部下部ヘラケズリ、胴部下端ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ		87
12	G-111	瓦	平瓦	SI1975	1	器高28.4 口径18.7 底径9.9	凸面縄叩き痕	凹面布目痕		91-92

第34図　142次調査区出土遺物(1)

SI1980竪穴住居跡　東西4.5m以上、南北2.3m以上の竪穴住居跡である。東壁中にカマドがあり、E－7°－S方向に煙道が1.5m以上延びている。カマドの燃焼部内には焼土が、前面の床面上には炭化物が堆積している。また床面までの深さは検出面より20～25cm程である。床面上の西壁、南壁の一部には、周溝が巡っている。また長軸110cm、短軸90cm、深さ35cm程のP1がある。床面までの堆積土は、大別して1層である。

遺物は、床面上から外面ヘラケズリ調整の顕著な土師器C－905甕（第35図3）、薄手で回転ハケメの施されたD－76甕（第35図1）などが出土している。

SI1965・1970・1975竪穴住居跡を切っている。

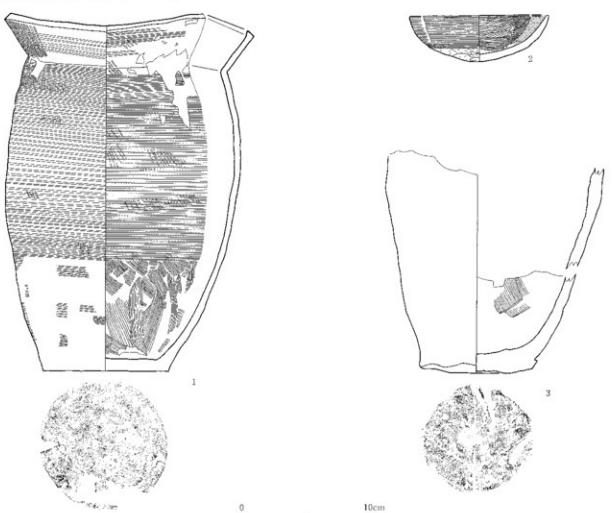
SK1985土坑　調査区の東壁ぎわで検出し東西1.3m以上、南北2.2mの土坑で、深さは10～25cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は著しく凹凸がある。堆積土は3層で、焼土、炭化物を含んでいる。

遺物は、土師器、須恵器の小片や焼土塊、焼け面のある礫などを出土している。

SK2007土坑を切っている。

SK2006土坑　調査区の南東ぎわで検出し東西1.9m以上、南北0.8m以上の土坑で、深さは30～40cmである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は凹凸がある。堆積土は4層で、炭化物を多量に含んでいる。

遺物は、内面黒色処理された丸底の土師器C－907坏（第35図2）が出土し、その他土師器、須恵器の小片や羽口、鉄滓などが少量出土している。



遺取番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	層位	位置(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	D-76	土師器	甕	SI1980	カマド	器高28.4　口径18.7　底径9.9	ハケメ→回転ハケメ	ハケメ→部ハケ上ハケメ→ナデ		95
2	C-907	土師器	坏	SK2006	1	器高3.7　口径11.0　底径7.8	口縁部・体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	口縁部・体部ミガキ	内面黒色処理	93
3	C-905	土師器	甕	SI1980	床面	現存高17.6　底径9.8	ヘラケズリ	指ナデ、ヘラナデ		96

第35図　142次調査区出土遺物(2)

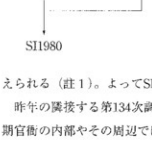
SK2007土坑　調査区の東壁ぎわで検出し東西0.9m以上、南北0.25m以上の土坑で、深さは10～17cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は北側で平坦な面があり南側より浅くなっている。堆積土は3層で、焼土、炭化物を含んでいる。

遺物は、出土していない。

SK1985土坑を切っている。

3．まとめ

調査を実施した地点は、方四町Ⅱ期官衙の内部で中枢部の東側にあたり、今年度調査した第140次調査の北東10mに位置する。発見された遺構のうち竪穴住居跡については、遺構の重複状況から次のような前後関係が考えられる。



SI1965からSI1980までの遺構で3時期、SI1975からSI1980までで2時期の変遷がある。SI1965、SI1970とSI1975については、重複関係が確認されないので明らかではない。

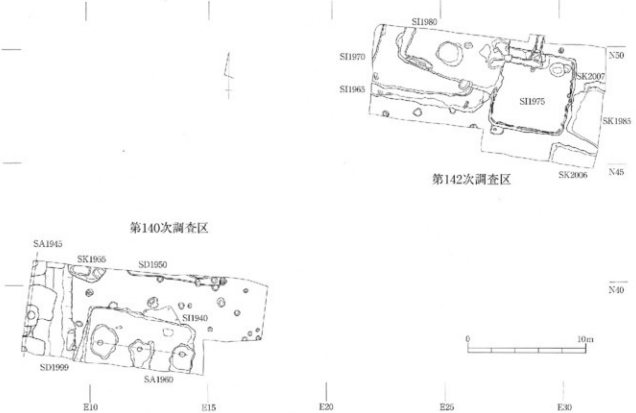
SI1975については、カマドの方向がN－3°－Eとほぼ真北方向をむき、出土した遺物もこれまで発見されてきた官衙期の遺物と特徴の上で相違ないものであり、Ⅱ期官衙の時期と考えられる。しかもそのSI1975と重複し新しいSI1980のカマド内からは回転ハケメ調整の土師器甕が出土し、8世紀後半代以降の年代が考えられる（註1）。よってSI1980については官衙の時期より新しい時期の遺構と言えよう。

昨年の隣接する第134次調査では、10世紀前半以降の掘立柱建物跡が発見されていた（註2）。これまで方四町Ⅱ期官衙の内部やその周辺では官衙の時期以降の遺構は希薄になり、水田跡や若干の竪穴遺構が発見されるに留まっていた（註3）。しかし官衙廃絶後に竪穴住居跡や掘立柱建物跡が存在し、平安時代になってⅡ期官衙跡地が何らかの利用をされるようになったことが明らかであるが、その範囲や具体的な機能については今後の調査を待ち検討していきたい。

註1　仙台平野以南の宮城県南部においては、8世紀中葉には須恵器生産の影響によりロクロ技術の土師器への導入が開始され始めたと考えられている。
佐藤恵幸・村田晃一「東北の煮炊具」古代の土器研究会第4回シンポジウム『古代の土器研究－律令的土器の様式の西・東4煮炊具－』1996

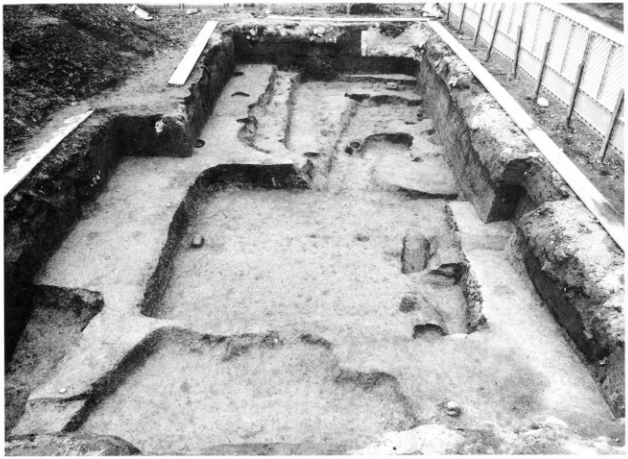
註2　第134次発掘調査　SB1925・1930・1935など
仙台市文化財調査報告書第250集　「郡山遺跡21－郡山遺跡・仙台平野の遺跡群　平成12年度発掘調査概報－」2001

註3　第65次発掘調査　Ⅲ層水田跡
仙台市文化財調査報告書第156集　「郡山遺跡　－第65次発掘調査報告書－」1993
第84次発掘調査　Ⅱb層水田跡
仙台市文化財調査報告書第145集　「郡山遺跡　－第84次・85次発掘調査報告書－」1990
第55次発掘調査　SI776竪穴遺構
仙台市文化財調査報告書第86集　「郡山遺跡Ⅵ　－昭和60年度発掘調査概報－」1985
第51次発掘調査　SX622
仙台市文化財調査報告書第86集　「郡山遺跡Ⅵ　－昭和60年度発掘調査概報－」1985



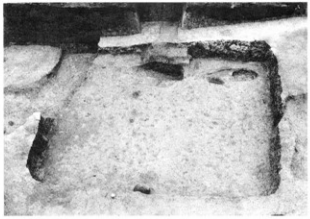
第36図　第140次調査区・第142次調査区遺構配置図

75　SI1980・1970・1965・1975竪穴住居跡（南より）



76　第142次調査区全景（東より）

77　第142次調査区全景（西より）



78　SI1975竪穴住居跡（南より）

79　SI1975竪穴住居跡カマド断面（南より）

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

80　C－908　坏　SI1975 ℓ 1
81　C－904　坏　SI1975 ℓ 1
82　C－906　坏　SI1975 ℓ 1
83　C－910　蓋　SI1975 ℓ 1
84　C－909　鉢　SI1975 ℓ 1
85　E－469　坏　SI1975 ℓ 2
86　E－468　盤　SI1975 ℓ 1
87　C－913　碗　SI1975 ℓ 1
88　C－914　甕　SI1975 ℓ 1
89　C－912　甕　SI1975 ℓ 1
90　C－915　甕　SI1975 ℓ 1
91　G－111　平瓦（凹面）　SI1975 ℓ 1
92　G－111　平瓦（凸面）　SI1975 ℓ 1
93　C－907　坏　SK2006 ℓ 1
94　C－911　坏　SI1975 ℓ 1
95　D－76　甕　SI1980カマド
96　C－905　甕　SI1980床面

Ⅵ　第143次発掘調査

1．調査経過

第143次調査は、仙台市太白区郡山1丁目８－30－502安藤直樹氏より、仙台市太白区郡山４丁目224－10において住宅新築に伴う発掘届が、平成13年12月14日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうことが考えられたため、敷地内において試掘調査を実施した。調査は住宅の建つ部分を対象に東西10.5m、南北2.5mの調査区を設定し、平成13年12月17日に表土排除を行なった。現況より深さ1.0m程（第Ⅳ層上面）で遺構の検出作業を行なったが、検出されたのがきわめて僅かのピットのみであったため、本調査の必要はないとして終了した。なおこの地区では平成13年３月７日に宅地造成に伴う試掘調査を実施し、同様の状況であった。

2．発見遺構・出土遺物

今回の試掘調査で発見された遺構は、ピットが７基のみである。これらのピットは直径16～39cmの円形あるいは楕円形で、深さは９～36cmである。堆積土は10YR3/2黒褐色粘土質シルトである。柱痕跡は検出されず、遺物も出土しなかった。

3．まとめ

今回の試掘調査を実施した地点は、方四町Ⅱ期官衙外郭東辺の材木列から東へ70m程離れている。また以前に同地区内で実施した宅造に伴う試掘調査では、材木列から80～110m離れた範囲を調査している。今回の調査を第143次調査Ａ区とし、以前の調査をＢ区（１、２トレンチ）とすると、外郭東辺に直行するように70～110mの範囲を調査したことになる。Ｂ区１トレンチでは、土坑が１基検出されていたが、官衙に伴う遺構は発見されていなかっ

第37図　第143次調査区位置図

た。これらの調査結果からは、外郭東辺から東へ70mから110mの範囲では南北へ横断する規模の大きな溝跡や大型の掘立柱建物跡などがないことを示唆している。方四町Ⅱ期官衙の南辺周辺と比較した場合は、今年度の第138次調査区で発見された廂付建物の存在する様相とは違いを見せている。今後も東辺部周辺での調査を重ね、より詳細な遺構の様相を明らかにしていく必要があろう。

97　第148次調査区　A区（西より）

98　第148次調査区　B区　1トレンチ（東より）

99　第148次調査区　B区　2トレンチ（東より）

第38図　第143次調査区　A区・B区配置図

Ⅶ 総　　括

今年度の調査は第５次５ヵ年計画の第２年次目にあたり南方官衙地区の調査を主に行った。この地区はⅠ期官衙東辺とも重なっており Ⅰ期官衙、Ⅱ期官衙双方の視点から重要な地点である。また、個人住宅の建替えのうち、基礎構造が深く遺構を損なうような個人住宅については「仙台平野の遺跡群」として３件の小規模な調査を実施した。ここでは南方官衙地区の調査成果を主に総括する。

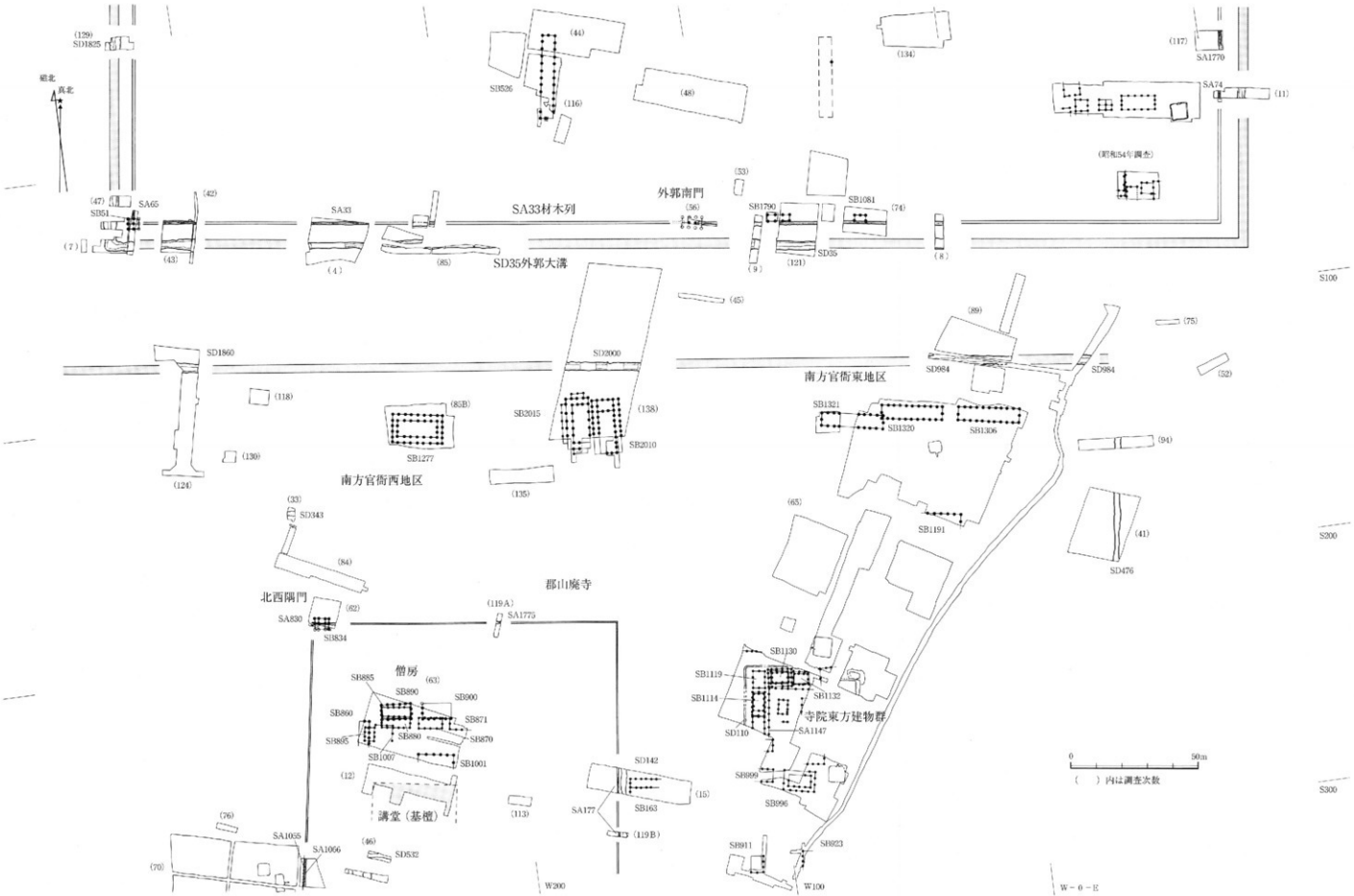
（１）Ⅱ期官衙の調査

Ⅱ期官衙については、Ⅲ3でも述べたが、SB2010・2015掘立柱建物跡の構造と役割について検討を要する。SB2010掘立柱建物跡については東西二面に廂があり、周仕切りのある構造となっている。このような建物跡は平城京左京５条２坊内の建物跡や同左京３条閑辺の長屋王邸B期の建物跡などのように、平城京内の一区画における主要殿舎に見られる構造と類似性が認められる。このような建物が方四町Ⅱ期官衙南門の南延長線上に西に面するような位置に存在したという占地の点からみても、この建物がきわめて重要な機能を持っていたものと考えられる。SB2015掘立柱建物跡については三面廂にさらに外側に柱列が廻ることから特殊な構造が考えられる。この特異な構造については伝世した絵巻や近年の発掘調査の成果により復元された建物跡に類似する点が認められる。平安京建礼門前の土廂（註１）や平城宮東院楼閣宮殿の復元図（註２）などである。これらを見ると小規模な下屋状の屋根が考えられている。また、飛鳥宮のエビノコ郭の大殿には縁があり、その外側には階段が取り付けられている（註３）。

このような建物が材木列により区画された官衙の外側に一定の空閑地を介して建ち並ぶ様相はどのように理解すべきなのであろうか。方四町Ⅱ期官衙が官衙内の中心的な施設であったとしても、その南方に東西10間、南北２間の建物や四面廂付建物が建ち並ぶのは、一定の関連を有しながらも別な機能を果たしていたことを示唆するものである。Ⅱ期官衙におけるこれら遺構群の様相とその違いを明らかにして行く視点が今後重要と考えられる。

またこれらの建物跡の規模については、今回発見された建物跡の床面積はSB2010掘立柱建物跡が226.8㎡で、SB2015掘立柱建物跡は172.48㎡である。これらの建物跡を同様な観点からこれまで本遺跡で発見されている掘立柱建物跡と比較すると、Ⅱ期官衙正殿であるSB1250四面廂付建物跡が187.92㎡、南方官衙西地区のSB1277四面廂付建物が215.01㎡であり、SB2010掘立柱建物跡はこれらの建物よりさらに規模が大きく、これまでに本遺跡で発見されてきた掘立柱建物跡では最大の床面積を持つことが明らかとなった。またSB2015掘立柱建物跡についても方四町Ⅱ期官衙中枢部や南方官衙地区で発見されている長舎や楼閣風の建物と比較してもほぼ同等の床面積となっている。東北地方の古代城柵官衙遺跡で発見されている主な大型建物跡と比較しても同様であり、SB2010掘立柱建物跡は床面積が230.1㎡である多賀城跡政庁Ⅰ期正殿とほぼ同等の規模を有する。

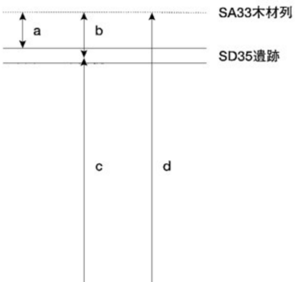
今回の調査によって方四町Ⅱ期官衙南辺の様相は、方四町Ⅱ期官衙の南にはSD35外郭大溝とSD2000外溝との間に遺構が希薄な空閑地が広がり、SD2000外溝から南に南方官衙地区が、さらに郡山廃寺、寺院東方建物群が広がることが確認できた。方四町Ⅱ期官衙南辺での材木列、外郭大溝、外溝のそれぞれの距離関係はおおむね下図（P57）のとおりである。特に今回の調査ではSD35外郭大溝が検出できる地点が調査対象外であったためSD35外郭大溝は推定位置であるが、SD35外郭大溝とSD2000外溝との心心間隔（ｃ）は48.5ｍ程、SA33材木列とSD2000外溝の心心間隔（ｄ）は57.5ｍ程となる。SA33材木列とSD35外郭大溝との心心間隔（ｂ）が断片的な調査であるため、それぞれの調査地点により若干数値は異なるように、SD35外郭大溝とSD2000外溝との心心間隔（ｃ）も同様の可能性がある。また、SD2000外溝とそれぞれの建物跡との間隔は、SB2010掘立柱建物跡では北梁行からは12.9～13.6



第39図　南方官衙地区周辺図

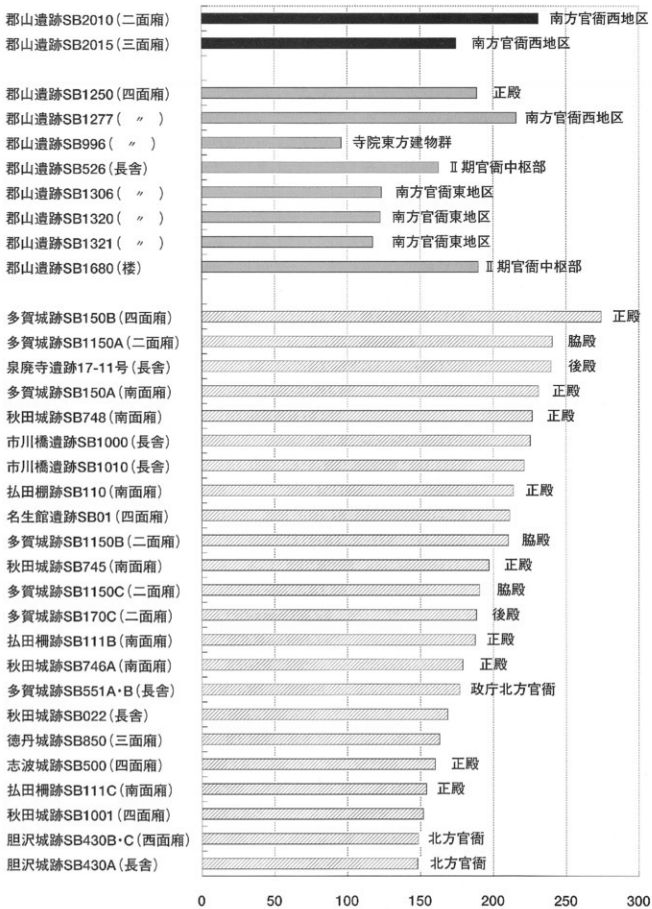
遺構番号			桁行(m)			梁行(m)			面積(㎡)	性格	備考
			間	柱間	総長	間	柱間	総長			
郡山遺跡SB2010	掘立	南北棟	10	2.00～2.20	21.0	5	2.00～2.20	10.8	226.80	南方官衙西地区	二面廂
郡山遺跡SB2015	掘立	南北棟	7	2.3～3.1	19.6	4	2.0～2.25	8.8	172.48	南方官衙西地区	三面廂
郡山遺跡SB1250	掘立	東西棟	8	1.95～2.3	17.4	5	2.05～2.35	10.8	187.92	正殿	四面廂
郡山遺跡SB1277	掘立	東西棟	8	1.9～2.8	19.6	5	1.9～2.5	11.0	215.01	南方官衙西地区	四面廂
郡山遺跡SB996	掘立	東西棟	5	2.1～3.0	12.0	3	2.2～2.8	8.0	96	寺院東方建物群	四面廂
郡山遺跡SB536	掘立	南北棟	12	2.46～2.92	33.0	2	2.43～2.49	4.9	161.7	Ⅱ期官衙中枢部	長舎
郡山遺跡SB1306	掘立	東西棟	10	2.2～2.5	23.7	2	2.5～2.65	23.7	123.24	南方官衙東地区	長舎
郡山遺跡SB1320	掘立	東西棟	10	2.2～2.5	23.5	2	2.3～2.8	5.2	122.2	南方官衙東地区	長舎
郡山遺跡SB1321	掘立	東西棟	10	2.1～2.7	23.5	2	2.5	5.0	117.5	南方官衙東地区	長舎
郡山遺跡SB1680	総柱	南北棟	5	2.48～3.37	14.8	5	2.43～2.72	12.8	189.44	楼	楼
多賀城跡SB150B	礎石	東西棟	7	2.4～3.6	22.8	4	2.4～3.6	12.0	273.60	正殿	四面廂
多賀城跡SB1150A	掘立	南北棟	5	3.2	16.0	4		15.0	240.00	脇殿	東西二面廂
泉廃寺遺跡17－11号	掘立	東西棟	10		36.2	2		6.6	238.92	後殿	長舎
多賀城跡SB150A	掘立	東西棟	5	3.8～4.1	19.5	3	3.3～4	11.8	230.10	正殿	南面廂
秋田城跡SB748	掘立	東西棟	5	3.6	18.0	4	2.7～4.5	12.6	226.80	正殿	南面廂
市川橋遺跡SB1000	掘立	南北棟	11		32.7	2		6.9	225.63		長舎
市川橋遺跡SB1010	掘立	南北棟	11		33.1	2		6.7	221.77		長舎
払田柵跡SB110	掘立	東西棟	5		17.7	4		12.1	214.17	正殿	南面廂
名生館遺跡SB01	掘立	東西棟	7	2.5	17.5	5	2.4	12.1	211.75		四面廂
多賀城跡SB1150B	礎石・掘立	南北棟	5	3.2	16.0	4		13.2	211.20	脇殿	身舎に礎石　東西二面廂
秋田城跡SB745	掘立	東西棟	5	3.3	16.5	3	3.5～5	12.0	198.00	正殿	南面廂
多賀城跡SB1150C	礎石・掘立	南北棟	5	3.2	16.0	4		12.0	192.00	脇殿	身舎に礎石　東西二面廂
多賀城跡SB170C	礎石	東西棟	5	3.5	17.5		2.7	10.8	189.00	後殿	南北二面廂
払田柵跡SB111B	掘立	東西棟	5		16.7	3		11.3	188.71	正殿	南面廂
秋田城跡SB746A	掘立	東西棟	5	3.3	15.0	3	2.8～4.5	12.0	180.00	正殿	南面廂
多賀城跡SB511A・B	掘立	東西棟	7	3	21.0			8.5	178.50	政庁北方地区	長舎
秋田城跡SB022	掘立	南北棟	7	2.7	18.9	3	3	9.0	170.10		長舎
徳丹城跡SB850	掘立	東西棟	6		13.9	4		11.9	165.41		東・南北二面廂
志波城跡SB500	掘立	東西棟	6	3	18.0	3	3	9.0	162.00	正殿	四面廂
払田柵跡SB111C	掘立	東西棟	5		15.9	3		9.8	155.82	正殿	南面廂
秋田城跡SB1001	掘立	南北棟	5	2.5～3.1	13.9	4	2.2～3.1	11.0	152.90		四面廂
胆沢城跡SB430B・C	掘立	南北棟	7		16.6	4		9.1	151.06	北方官衙	西面廂
胆沢城跡SB430A	掘立	南北棟	7		16.6	4		9.1	151.06	北方官衙	長舎

m、SB2015掘立柱建物跡では北梁行からは12.6～12.9m、北小柱穴列西端からは10.9mである。最近の藤原宮の研究の成果では、空閑地の存在を条坊の施工と宮の造営をいったいに進めることのできなかったとする説がある（註4）。本遺跡では、方四町Ⅱ期官衙の外側に広がる空閑地の性格を究明するためには、方四町Ⅱ期官衙のみならずⅡ期官衙全体の構造やⅠ期官衙からⅡ期官衙への建替えの様相、造営年代などを視野に入れて検討していく必要があろう。

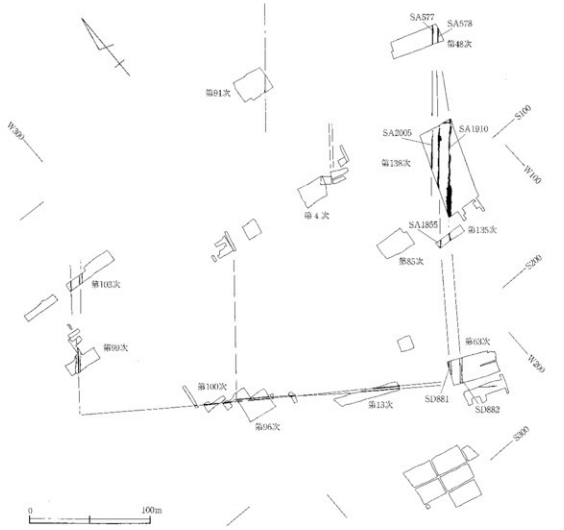


a…SA33からSD35
b…SA33とSD35との心心間隔
c…SA33とSD2000との心心間隔
d…SA33からSD2000との心心間隔

	m	調査地点	調査次数
a	(4.45m)	推定	＊
b	8.8～9m	南辺	4次
b	9m	西辺	7次
b	8.5m	東辺	11次
b	7.2～73m	西辺	16次
b	8.7m	南辺	42次
b	8.8m	南辺	43次
b	8.2m	南辺	121次
c	(48.5m)	南辺	138次
d	(57.5m)	南辺	138次


郡山遺跡SB2010（二面廂）
南方官衙西地区
郡山遺跡SB2015（三面廂）
南方官衙西地区
郡山遺跡SB1250（四面廂）
正殿
郡山遺跡SB1277（　〃　）
南方官衙西地区
郡山遺跡SB996（　〃　）
寺院東方建物群
郡山遺跡SB526（長舎）
Ⅱ期官衙中枢部
郡山遺跡SB1306（　〃　）
南方官衙東地区
郡山遺跡SB1320（　〃　）
南方官衙東地区
郡山遺跡SB1321（　〃　）
南方官衙東地区
郡山遺跡SB1680（楼）
Ⅱ期官衙中枢部
多賀城跡SB150B（四面廂）
正殿
多賀城跡SB1150A（二面廂）
脇殿
泉廃寺遺跡17-11号（長舎）
後殿
多賀城跡SB150A（南面廂）
正殿
秋田城跡SB748（南面廂）
正殿
市川橋遺跡SB1000（長舎）
市川橋遺跡SB1010（長舎）
払田棚跡SB110（南面廂）
正殿
名生館遺跡SB01（四面廂）
多賀城跡SB1150B（二面廂）
脇殿
秋田城跡SB745（南面廂）
正殿
多賀城跡SB1150C（二面廂）
脇殿
多賀城跡SB170C（二面廂）
後殿
払田柵跡SB111B（南面廂）
正殿
秋田城跡SB746A（南面廂）
正殿
多賀城跡SB551A・B（長舎）
政庁北方官衙
秋田城跡SB022（長舎）
徳丹城跡SB850（三面廂）
志波城跡SB500（四面廂）
正殿
払田柵跡SB111C（南面廂）
正殿
秋田城跡SB1001（四面廂）
胆沢城跡SB430B・C（西面廂）
北方官衙
胆沢城跡SB430A（長舎）
北方官衙
0
50
100
150
200
250
300

また、SB2010掘立柱建物跡は方四町Ⅱ期官衙仮想中軸線の東側に立地することから、方四町Ⅱ期官衙外郭南門から南へ延びると推定される道路跡との関連や、仮想中軸線を挟み東側にSB2010掘立柱建物跡と対称の位置にある建物跡の存在についても今後検証していく必要がある。またSB2015掘立柱建物跡についてもその西側に第85次調査で発見されたⅡ期官衙正殿を上回る規模を持つSB1277四面廂付建物跡が存在することから、さらにSB1277四面廂付建物跡の西側にSB2015掘立柱建物跡と関連する建物跡が存在し、官衙ブロックを形成している可能性も推測できる。今後追加して調査を実施する必要があろう。近年郡山遺跡地区で行われている長町周郡心土地区画整理事業に伴う発掘調査では、方四町Ⅱ期官衙西辺でも南辺同様に外溝と考えられる溝跡が発見された。さらにその外側には郡山遺跡の官衙と同年代と考えられる竪穴住居群が発見され、官衙に関連した人々の集落の存在が確認されている（註５）。これらにより方四町Ⅱ期官衙西、南辺外の様相が明らかになりつつある。しかしそれに対して方四町Ⅱ期官衙外郭大溝の北、東側では現況が住宅地となっているため調査が実施できず詳細は明らかになっていない。そういう中で個人住宅の建替え、宅地造成時に実施された第143次調査は重要である。今後住宅の建替え時などに調査を実施して成果を蓄積し、官衙外周辺域全体の様相を明らかにしていきたい。



第40図　Ⅰ期官衙南部遺構配置図

（2）Ⅰ期官衙の調査

Ⅰ期官衙については、本調査区は昭和59年度の第48次調査区と昨年度実施した第135次調査区との中間に位置することから、Ⅰ期官衙の東辺となる材木列である第48次調査で発見されていたSA577とSA578、第135次調査で発見されていたSA1855とSA1910の間を結ぶ2列の材木列の発見を想定していた。今回の調査で昨年度発見されたSA1855材木列とSA1910材木列の延長と考えられる2列の材木列がそれぞれ発見され、SA1855材木列には小規模な棟門と考えられるSB1990門跡が、SA1910材木列には東西に延びるSA2001材木列が接続することが確認された。さらに今回の調査でこれまで発見されなかったSA2005材木列が発見されたことによって南北に延びる材木列は3列となった。これまでⅠ期官衙南部の様相は南辺、東辺での調査から官衙南限を区画する材木列が平成4年度の第96次調査でSA1380材木列からSA272材木列への2小期の変遷が確認され、SA272材木列はさらに西へ延びていることから、官衙が西方へ拡大したと考えられていた（註6）。しかし今回発見したSA1910材木列は直線的に延びる箇所もあるが昨年度の第135次調査区と同様に調査区北部では顕著に屈曲する部分も存在する。また、SA2005材木列は調査区北部で途切れることなどから、今回の調査区で発見した3列の材木列が第48次調査区で発見された2列の材木列とどのように接続するかについて再検討する必要がある。SA2005材木列は北に延長すれば第48次調査で発見されていたSA577に接続するとも考えられるが、調査区北部で途切れること、南に延長すれば平成3年度に宅地造成に伴い実施した第93次調査区（註7）で検出されるはずであるが検出されなかったことから、SA2005材木列は内郭区画となる可能性もある。また、SA1910材木列についても北に延長すれば方四町Ⅱ期官衙外郭南門跡を調査した昭和60年度の第56次調査区内で検出されているであろう。Ⅰ期官衙の遺構は調査地点により造られた方向に微妙な振れがあることや、同一の材木列でも屈曲する部分があるため、Ⅰ期官衙東辺材木列については、今後発掘調査によって再確認して行く必要がある。

また、今年度遺跡内西部で行われた長町副都心土地区画整理事業に伴う調査ではⅠ期官衙に関連すると考えられる溝跡が発見されている。上幅3～4m、下幅3～3.5m、深さ50cmで、断面形は逆台形の溝跡であり、L字型に屈曲している。南北方向に延びる箇所ではⅠ期官衙西辺の推定ラインよりさらに西側に離れ平行している。検出された屈曲部から北側には60m以上、東側には40m以上延びている。Ⅰ期官衙西辺の外側に位置しているが官衙と同方向を向く（註8）。これまでの郡山遺跡の調査ではこの溝跡の北に延長した部分については未調査であるが、東に延長した部分が今回調査した第138次調査の北端にあたり、そこではⅠ期官衙に関連すると考えられるSD2037溝跡が発見されている。SD2037溝跡はSA2001材木列に切られる古い溝跡であり、SA2001材木列はⅠ期官衙の東辺と考えられるSA1910材木列に接続している。調査区設定の制約からこの溝跡の幅など詳細については明らかにできなかったが、遺構の深さ、推定される断面形、底面の形状などからSD2037溝跡が長町副都心土地区画整理事業に伴う調査で発見された溝跡とは同一の遺構となる可能性がある。しかし両調査地点にかなりの距離があることから断定はできない。今後周辺での調査の検討を積み重ねⅠ期官衙全体の様相について明らかにしていきたい。

註1　「年中行事絵巻　巻1」『日本の絵巻8』中央公論社

註2　第292次調査　第43図『奈良国立文化財研究所　年報　1999－Ⅲ』

註3　「飛鳥の宮」復元概型　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館

註4　林部　均「第3章　条坊制導入期の古代宮都」『古代宮都形成過程の研究』2001

註5　「郡山遺跡地区」第28回古代城柵官衙遺跡検討会資料集　2002

「郡山遺跡」第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料集　2002

「西台畑遺跡」平成12年度　宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨　2000

註6　仙台市文化財調査報告書第250集　「郡山遺跡21　－郡山遺跡・仙台平野の遺跡群　平成12年度発掘調査概報－」2001

註7　第93次調査は平成3年度に宅地造成に伴って実施したが、原因者の事情により調査が中断していた。昨年度行われた第133次調査でその一部を調査している。

仙台市文化財調査報告書第250集「郡山遺跡21」　2001

註8　「郡山遺跡地区」第28回古代城柵官衙遺跡検討会資料　2002

参考文献

仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」　「郡山遺跡発掘調査概報」　1980．3

仙台市文化財調査報告書第29集　「郡山遺跡Ⅰ」　1981．3

仙台市文化財調査報告書第38集　「郡山遺跡Ⅱ」　1982．3

仙台市文化財調査報告書第42集　「郡山遺跡－第13次－」　1982．3

仙台市文化財調査報告書第46集　「郡山遺跡Ⅲ」　1983．3

仙台市文化財調査報告書第64集　「郡山遺跡Ⅳ」　1984．3

仙台市文化財調査報告書第74集　「郡山遺跡Ⅴ」　1985．3

仙台市文化財パンフレット第10集　「郡山遺跡」　1985．10

仙台市文化財調査報告書第86集　「郡山遺跡Ⅵ」　1986．3

仙台市文化財調査報告書第96集　「郡山遺跡Ⅶ」　1987．3

仙台市文化財調査報告書第110集　「郡山遺跡Ⅷ」　1988．3

仙台市文化財調査報告書第124集　「郡山遺跡Ⅸ」　1989．3

仙台市文化財調査報告書第133集　「郡山遺跡Ⅹ」　1990．3

仙台市文化財調査報告書第145集　「郡山遺跡－第84・85次－」　1990．6

古代城柵官衙遺跡検討会　第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料　1991．2

仙台市文化財調査報告書第146集　「郡山遺跡ⅩⅠ」　1991．3

仙台市文化財パンフレット第18集　「郡山遺跡」　1989．12

仙台市文化財調査報告書第156集　「郡山遺跡－第65次発掘調査報告書－」　1992．3

仙台市文化財調査報告書第161集　「郡山遺跡ⅩⅡ」　1992．3

仙台市文化財調査報告書第169集　「郡山遺跡ⅩⅢ」　1993．3

仙台市文化財調査報告書第178集　「郡山遺跡ⅩⅣ」　1994．3

仙台市文化財調査報告書第194集　「郡山遺跡ⅩⅤ」　1995．3

仙台市文化財調査報告書第210集　「郡山遺跡ⅩⅥ」　1996．3

仙台市文化財調査報告書第215集　「郡山遺跡ⅩⅦ」　1997．3

仙台市文化財調査報告書第222集　「郡山遺跡－第112次－」　1997．3

仙台市文化財パンフレット第40集　「発掘！郡山遺跡－郡山遺跡に埋もれた歴史を掘る－」　1997．10

仙台市文化財調査報告書第227集　「郡山遺跡ⅩⅧ」　1998．3

仙台市文化財調査報告書第234集　「郡山遺跡ⅩⅨ」　1999．3

仙台市文化財調査報告書第244集　「郡山遺跡ⅩⅩ」　2000．3

仙台市文化財調査報告書第250集　「郡山遺跡21」　2001．3

仙台市文化財調査報告書第251集　「郡山遺跡－第124次発掘調査報告書－」　2001．3

調査成果の普及と関連活動

1．広報・普及・協力活動

年　月　日	行　事　名　称	担当職員	主　催
2001．6．6	遺跡巡検	木村	地底の森ミュージアム友の会
7．4	発掘現場・展示室見学	長島・松本	東長町小学校６年
7．7	博物館実習見学	木村・松本	宮城学院女子大学
8．3	発掘体験・展示室見学	松本	蒲町中学校３年社会科
9．27	発掘体験・展示室・ピロティ見学	木村・長島	仙台市教育センター
10．4	発掘体験・展示室・ピロティ見学	長島	桜ヶ丘中学校両親学級
10．23	発掘体験・展示室・ピロティ見学	松本	郡山中学校３年総合学習
11．15	報道発表	木村・長島・松本	仙台市教育委員会
11．16	発掘体験・展示室・ピロティ見学	松本	矢巾町教育委員会
11．17	現地説明会	木村・長島・松本	仙台市教育委員会
11．17	博物館実習見学	木村・長島・松本	宮城学院女子大学
11．30	発掘体験事前指導	松本	東長町小学校６年
12．4	発掘体験	松本	東長町小学校６年
2002．1．19	宮城県遺跡調査成果発表会	長島・松本	宮城県考古学会・岩沼市教育委員会
2．9～10	第28回古代城柵官衙遺跡検討会	木村・長島・松本	古代城柵官衙遺跡検討会

2．調査指導委員会の開催

第30回　郡山遺跡調査指導委員会　平成14年３月１日　教育局第１会議室

○平成13年度の調査成果について

○平成14年度の調査計画について

3．資料の貸し出し・展示

東北歴史博物館	常設展「古代」城柵とエミシ
仙台市博物館	常設展「原始・古代・中世」
横浜市歴史博物館	企画展「東へ西へ－律令国家を支えた古代東国の人々－」
宮城学院女子大学	博物館実習
郡山中学校	１年生社会科
仙台歴史と文化財ガイドボランティア友の会	「えんじょいん仙台」平成13年度ボランティア発表展示

4．展示室の利用者

平成13年４月～平成14年３月　　298名

100　発掘体験（東長町小学校　６年）

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡 22
副書名	平成13年度発掘調査概報
巻次	22
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第258集
編著者名	長島栄一、松本知彦
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1　TEL022-214-8893～8894
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 13′ 13″	141° 18′ 30″	20000522 ～20001218	2,206㎡	重要遺跡の範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡	官衙跡	縄文 ～ 近世	掘立柱建物跡・材木列 溝跡・土坑	縄文土器 土師器・須恵器・瓦 土製品・石製品・金属品 古銭	遺跡内で最大の建物跡と、特殊な構造の建物跡の発見

仙台市文化財調査報告書第258集

郡山遺跡 22

— 平成13年度発掘調査概報 —

2002年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263－1166